



チュートリアル

## ■ ごあいさつ

このたびは弊社製品 Qanat 2.0 をご購入いただきまして、誠にありがとうございます。

(以下、Qanat 2.0 を「本製品」と呼び、ご説明して参ります。)

本製品は、基幹系や情報系のデータベースにある様々なデータをフィルタ群やスクリプトを使って自由に加工し、転送するデータ転送ツールです。

なお、表示画面などは操作の一例として掲載しているものです。お客様のご使用環境によっては、画面に表示される内容が異なる場合がありますので、ご了承ください。

## ■ 著作権／ご注意



本書に記載されている会社名、製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

本書の内容の一部または全部を無断で複製転載することを禁じます。

本書に掲載の内容および製品の仕様などは、予告なく変更されることがあります。

本書の内容は万全を期して作成しておりますが、万一ご不明な点や誤り、記載もれ、乱丁、落丁などお気づきの点がございましたら、弊社までご連絡ください。

## ■ 本書の表記方法について

 注意	ハードウェアやソフトウェアの損害やエラーの発生を防止するために、必ず守っていただきたい情報を記載しています。
	特定のテーマに関する補足情報を記載しています。
メニュー、アイコン、ボタン、ウィンドウ、タブ	[ ] で囲んで表記します。 (例) [OK] ボタンをクリックします。
キーボード上のキー	<> で囲んで表記します。 (例) キーボードの<Tab>キーを押します。
参照先	章、節、項は『』、見出しは「」で囲んで表記します。 (例) 『2章1 ログインとログアウト』を参照してください。

# 目次

---

■ ごあいさつ .....	i
■ 著作権／ご注意 .....	i
■ 本書の表記方法について .....	i
目次 .....	ii
はじめに .....	1
本書について.....	1
実習いただく前に.....	1
<b>第1章 - 基本編 - .....</b>	<b>2</b>
1-1:データ転送定義を作成する(データベース) .....	3
1-2:データ転送定義を作成する(ファイル).....	14
1-3:スクリプト定義を作成する.....	30
1-4:QanatExecute を使用する .....	36
<b>第2章 - 応用編 - .....</b>	<b>38</b>
2-1:便利なフィルタ（応用） .....	39
2-2:オリジナルテーブルを作成する .....	44
2-3:オリジナルファイルを作成する .....	51
2-4:スケジュールを作成する .....	56

# はじめに

---

## 本書について

本書では、本製品の基本操作や、より便利な機能の使用方法について手順を追って紹介しています。実際に製品を操作しながら読み進めていただくことで、よりいっそうご理解いただくことができます。

## 実習いただく前に

次の点にご注意ください。

- 運用中データ（本番業務データ）を利用した実習は推奨できません。実習には本書サンプルデータをご利用いただくか、またはお客様ご自身でサンプルデータをご用意ください。データベース名、スキーマ名、テーブル名、フィールド名は CV 管理ツールで追加する必要があります。
- サンプルデータは CDROM の以下のフォルダに収められています。
  - ・ **DB テーブル** : 商品マスター  
/Sample/Tutorial/ db2\_syoumas.sql
  - ・ **DB テーブル** : 売り上げ実績  
/Sample/Tutorial/ db2\_uriage.sql
  - ・ **CSV** : 商品マスター  
/Sample/Tutorial/商品マスター.csv
  - ・ **XML** : 売上情報  
/Sample/Tutorial/売上情報.xml

※DB テーブルのサンプルデータは IBM DB2 V9.5（EE/WE）に対応しています。

- 実習の結果生じたデータ破損やデータ環境および運用中のデータ転送定義等への障害については弊社では責任を負いかねます。よって、影響を避けるために本書で利用する様々なデータや設定、生成物等（データ転送定義など）については本書でのみ利用するとの前提のもと、ご説明を進めてまいります。

# 第 1 章

## 第 1 章 - 基本編 -

## 1-1: データ転送定義を作成する(データベース)

ここではデータベースに対してデータの読み取り/書き込みを行うデータ転送定義の作成を習得します。

読取ったデータはフィルタを利用してデータの加工を行った後、対象のデータベースへ挿入します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none"><li>データベースに対して読み書きをする</li><li>フィルタを利用してデータ加工をする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>データ転送定義</li></ul>

### ● 事前修了しておきたい実習項目

ありません。

### ● 実習のシナリオ

“東日本 DB” データベースの“商品マスター” テーブルからデータを読み込み、

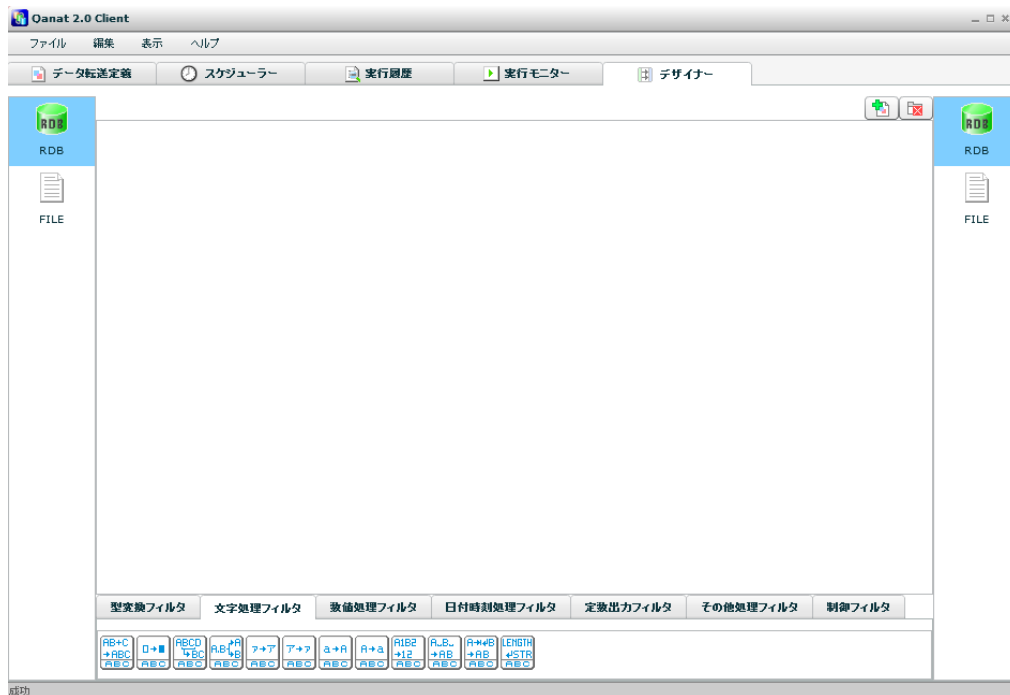
“西日本 DB” データベースの“商品マスター” テーブルへデータを新規挿入/更新します。

商品マスターには単価フィールドがありますが、西日本では東日本より 5% 高く設定します。

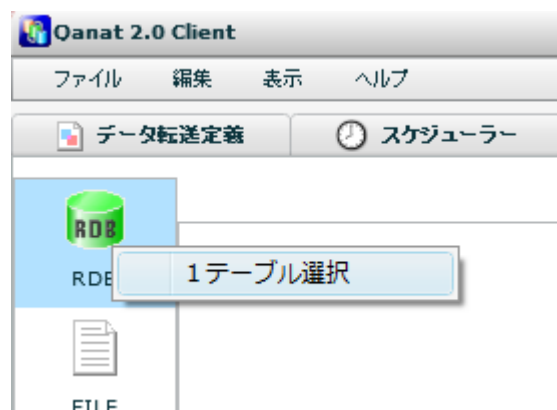
作成したデータ転送定義を保存しテスト実行を利用して検証した後、手動で実行します。

**手順 1： 本製品を起動し [デザイナー] タブを選択します。**

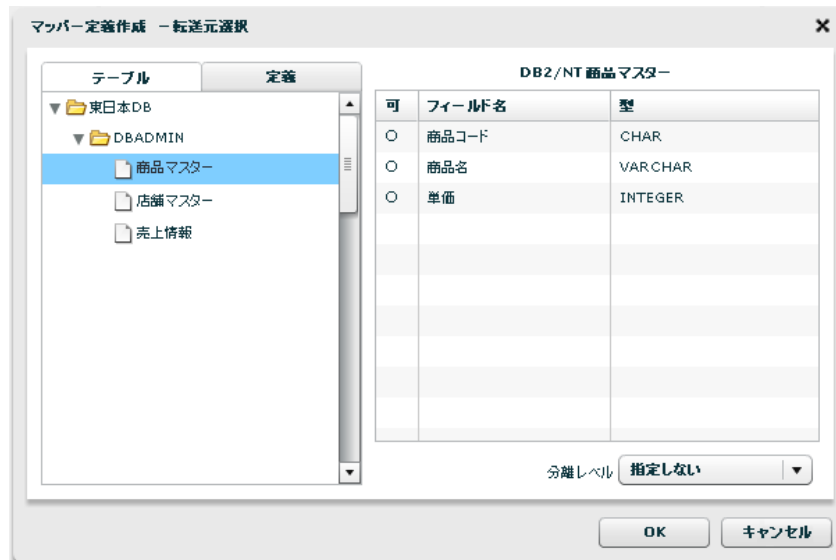
入力元（データ読み込み側）と出力先（データ書き込み側）には RDB を利用します。

**手順 2： RDB から入力元テーブルを選択します**

まず、入力元ではデータの読み込み先であるデータベースのテーブルを一つ選択します。



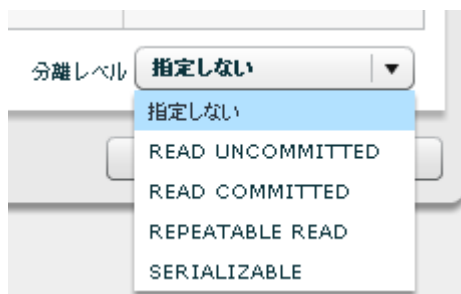
[RDB]と書かれたアイコンを右クリックし[1 テーブル選択]をクリックします。




表示されているフォルダ名は、CV 管理ツールで付けられたデータベースの論理名です。目的のデータベースからスキーマ名を選択し、データを読み込みたいテーブルを選択します。

画面右側には選択したテーブル情報が表示されています。目的のテーブルかどうかを判断します。

ここで分離レベルを選択します。この実習では分離レベルは既定値の[指定しない]を指定します。



[OK]ボタンをクリックし転送元選択画面を閉じます。

 実際の運用ではデータの特性に応じて適切な分離レベルを選択してください。

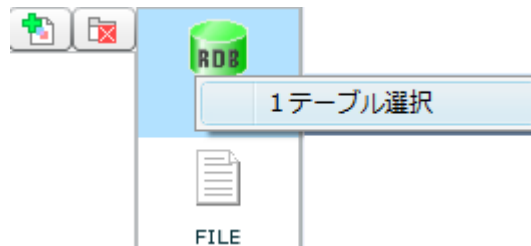


### 手順 3： RDB から出力先テーブルを選択します

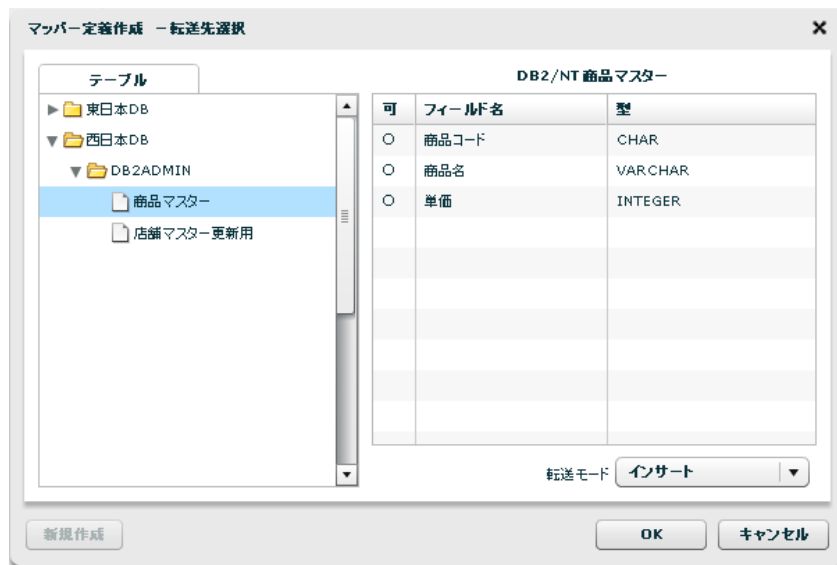
データの出力先テーブルを選択します。

手順 2 では“東日本 DB”からデータを読み込むよう設定しました。手順 3 では出力先として“西日本 DB”に取得したデータを転送するように指定します。

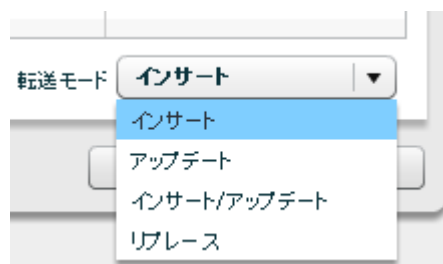
画面右側の[RDB]アイコンを右クリックし[1 テーブル選択]をクリックします。



[転送先選択]画面で“西日本 DB”を選択し“商品マスター”テーブルを選択することで転送先を指定します。



[転送先選択]画面では、転送モードを指定します。この実習では[インサート/アップデート]を選択します。



転送モードは次から一つ選択します。

- ・ インサート : データの新規挿入
- ・ アップデート : 更新キー指定によるデータ更新
- ・ インサート/アップデート : 更新キーが一致する既存データは更新し、それ以外は新規挿入
- ・ リプレース : 対象のテーブル内のデータを全て削除した後、新規挿入

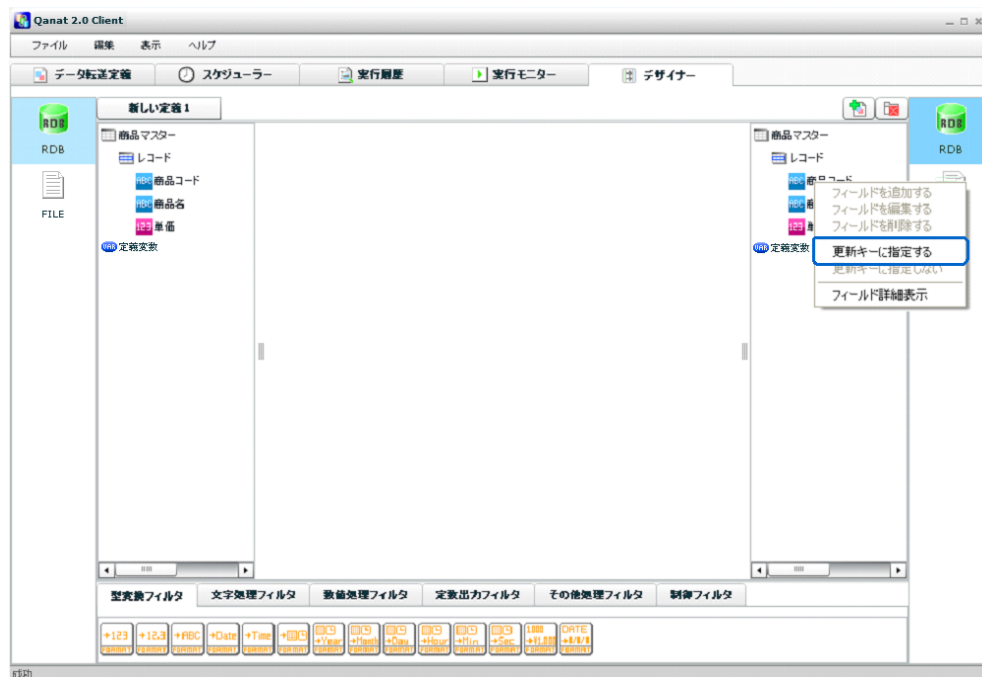
[OK]ボタンをクリックし転送先選択画面を閉じます。

#### 手順4: データマッピングをします

入力元と出力先のそれぞれのデータフィールドをつなぎ、データ転送設定をします。

手順3で転送モードを[インサート/アップデート]を選択しました。転送モードにアップデートを含む場合更新キーを指定する必要があります。

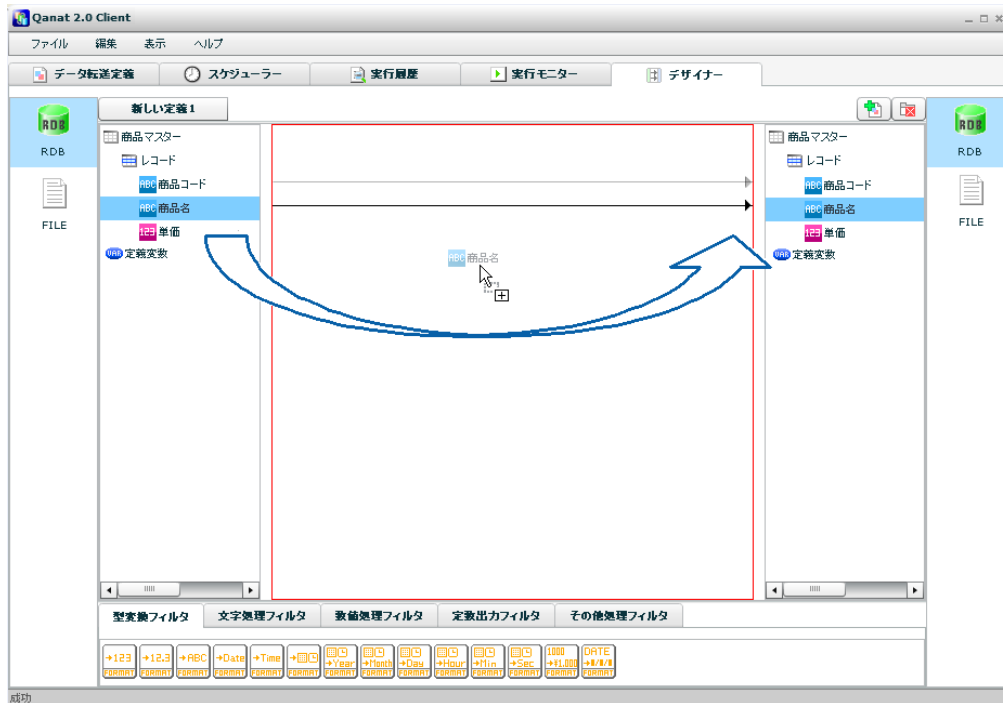
出力先のフィールドのうち、更新キーとなるフィールドを右クリックし、メニューから[更新キーに指定する]をクリックします。入力元と出力先で一致する更新キーが見つかった場合は更新し、一致しないデータの場合は新規に挿入されます。



出力先に主キー設定があるにも関わらず更新キーを指定しなかった場合や、転送モードが[インサート]である場合などに同一のキー値を持つデータを転送しようとするとき一貫性違反が発生する場合があります。この場合、本製品はエラーを記録し場合により処理が停止します。

更新キーは忘れずに必ず指定するようにしてください。

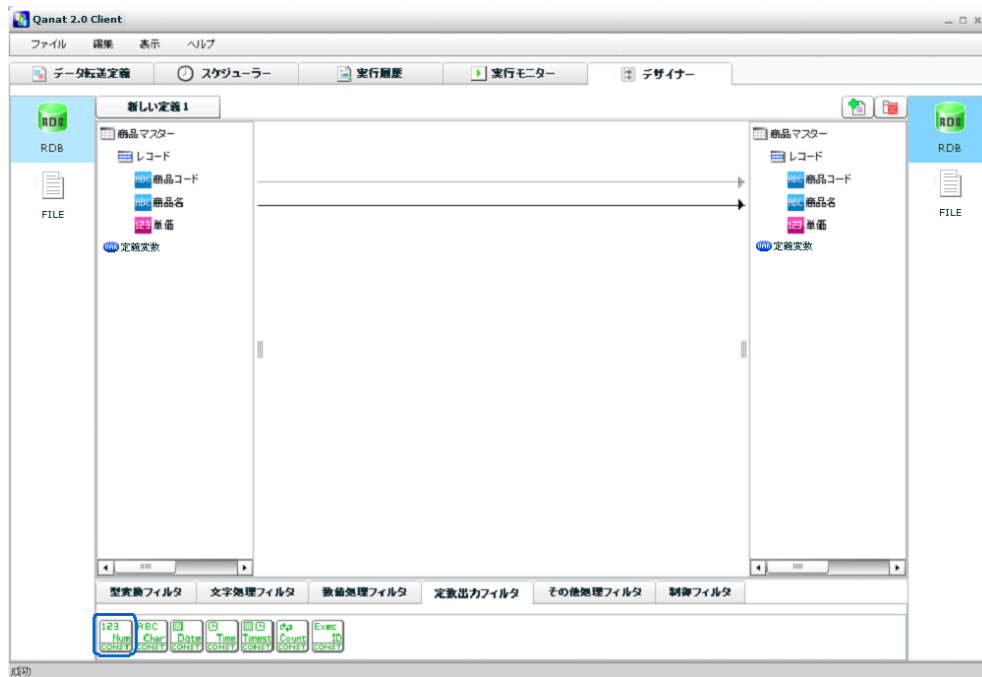
この実習では“東日本 DB の商品マスター”から“西日本 DB の商品マスター”ヘデータを転送することです。そのためには画面左側のフィールドを、右側の同名のフィールドに対してマウスでドラッグ&ドロップしマッピングを一つ一つ作成します。



単価フィールドは西日本のほうを 5% 高く設定したいため、東日本 DB の単価にその分上乗せした値を西日本 DB の単価フィールドにマッピングします。

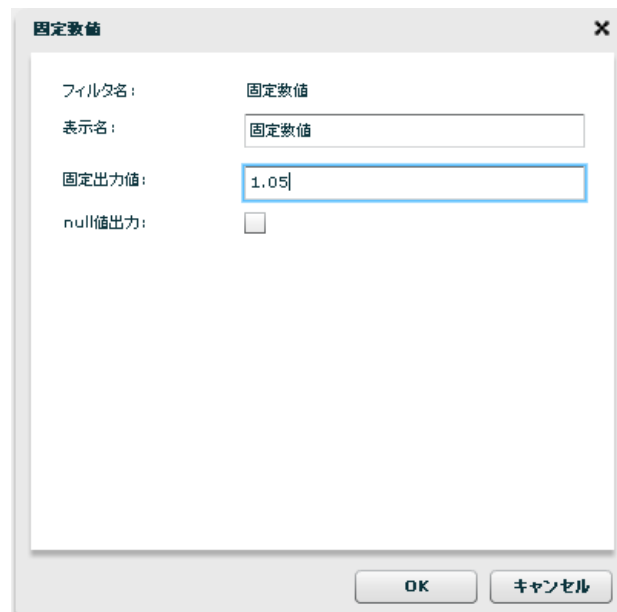
このマッピングには“5%”という値を持たせた固定数値フィルタと、掛け算フィルタを利用し表現します。

まず、画面下部の[定数出力フィルタ]タブを選択し、固定数値フィルタを画面中央のキャンバスにドラッグ&ドロップします。

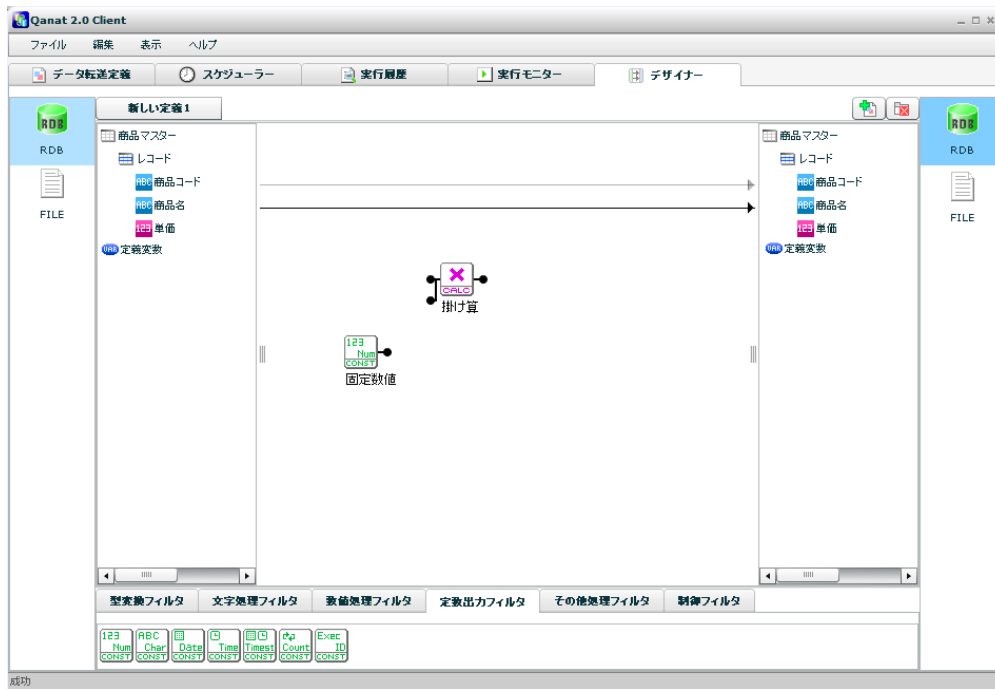


固定数値フィルタを配置すると次のようなプロパティ画面が表示されます。

[固定出力値]欄に5%である“1.05”と半角で入力し、[OK]をクリックします。

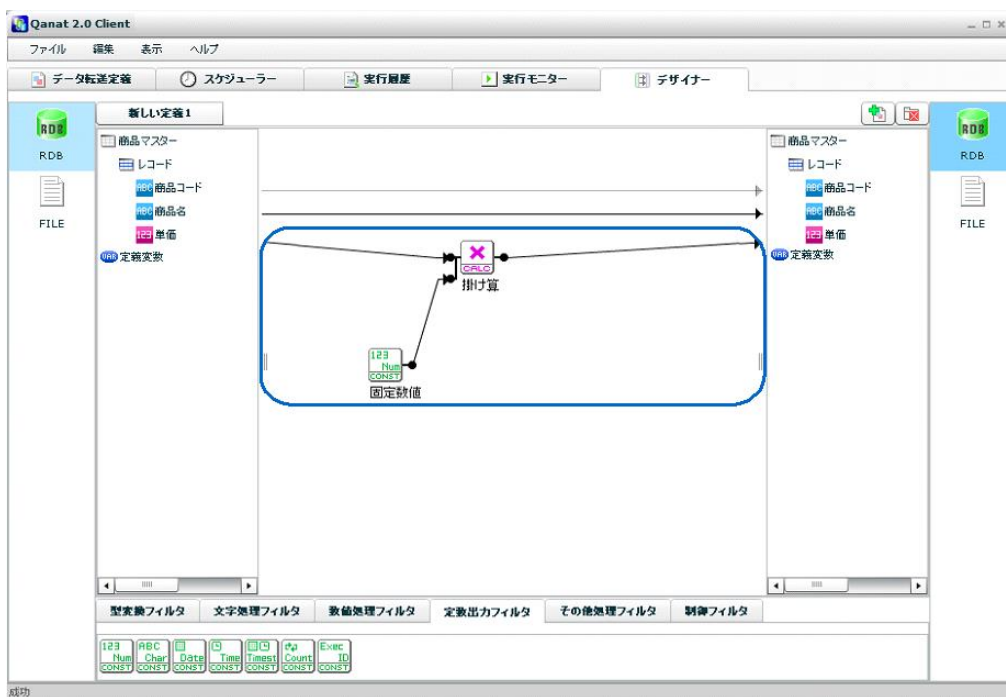


次に[数値処理フィルタ]タブから、掛け算フィルタを選択し、同様にドラッグ&ドロップし、画面中央付近に配置します。



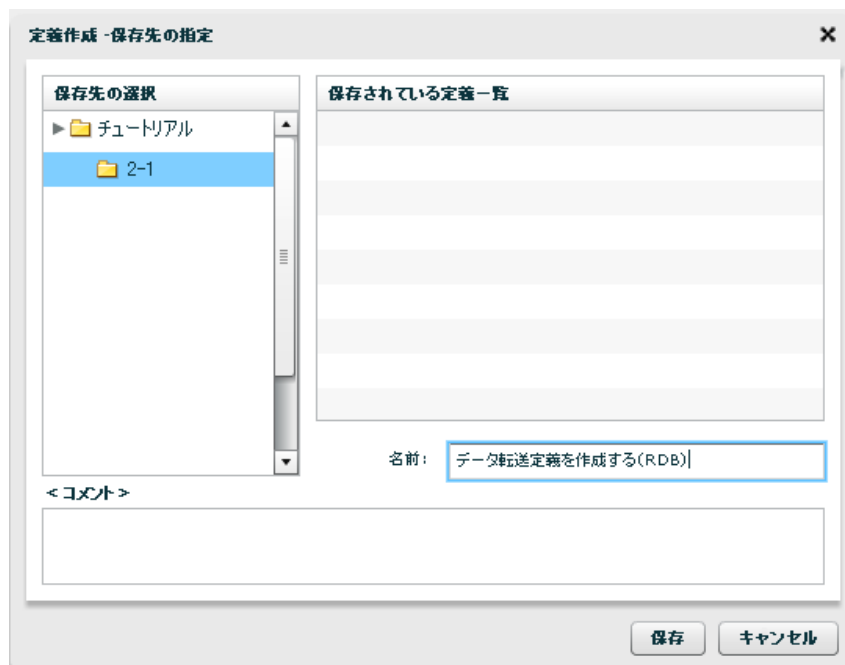
入力元の単価フィールドと、固定数値フィルタをそれぞれ掛け算フィルタにドラッグ&ドロップしお互いを結線（マッピング）します。

そして、掛け算フィルタを出力先の単価フィールドに対してマッピングすることで5%を乗じた値を出力先の単価フィールドにセットすることができます。



**手順 5: データ転送定義を保存します**

メニューバーの[ファイル]→[名前を付けて保存]をクリックします。次の画面のように保存先を選択し[名前]欄に定義名称、[コメント]欄にその定義の説明を入力し[保存]をクリックします。

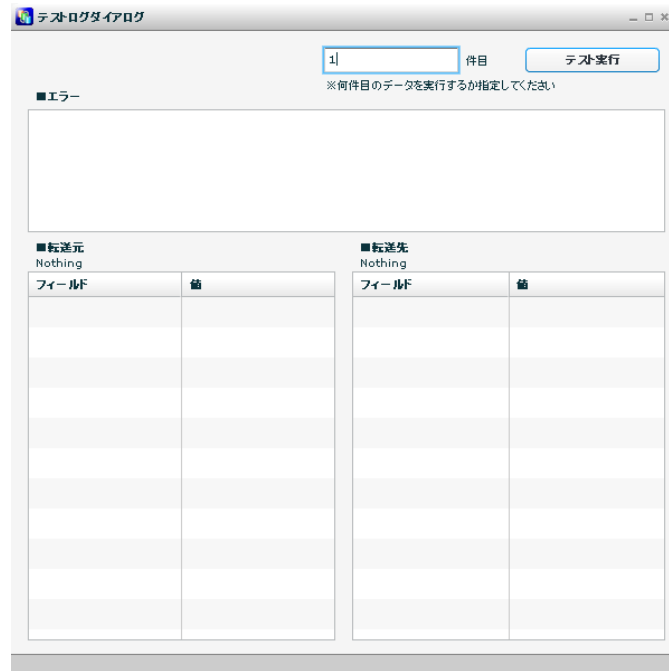


## 手順6： データ転送定義の検証をします

データ転送定義をテスト実行します。

保存を終えたらテスト実行機能を利用し、エラーなく正常に動作することを確認します。

メニューバーの [表示] → [テストログダイアログ] をクリックします。



テスト実行に利用するデータを指定し、[テスト実行] ボタンをクリックします。

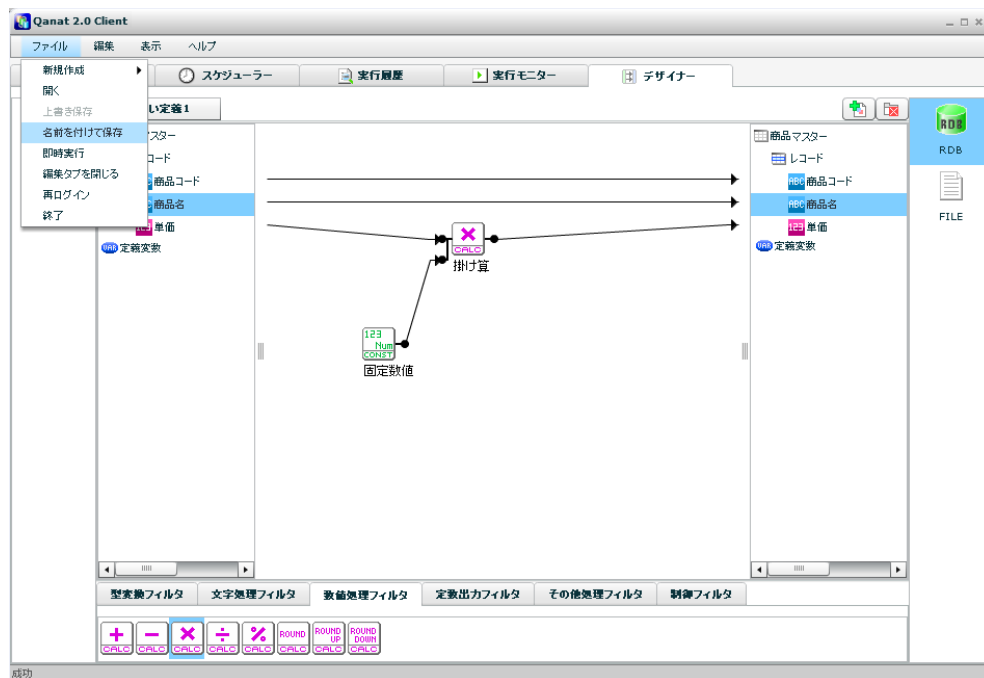
画面下部のデータ表示部に結果が表示されることを確認します。

❗ [エラー] 欄に赤字でエラー内容が表示される場合、データ転送定義に誤りがあるか、または存在しないデータを指定している場合があります。

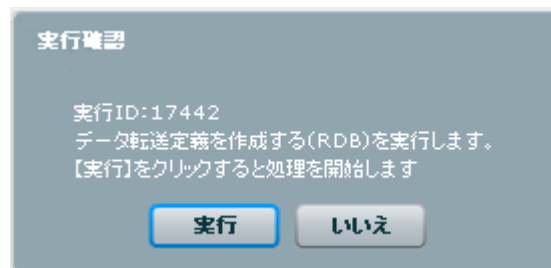
❗ テスト実行では出力先リソースは更新されません。

### 手順 7: データ転送定義を実行します

先ほど作成/保存した定義を画面のように開いた状態でメニューバーの[ファイル]→[即時実行]をクリックします。



実行確認画面では[実行]をクリックし実行を開始します。



西日本 DB データベースの商品マスターテーブルを参照し、結果を確認します。

東日本 DB の商品マスターテーブルの各商品データと、それぞれ 5% だけ高く設定された単価が表示されているはずですが。



## 1-2: データ転送定義を作成する(ファイル)

### CSV ファイル

CSV ファイルリソースに対してデータの読み取り/書き込みを行うデータ転送定義の作成を習得します。

読取ったデータはフィルタを利用してデータの加工を行った後、対象の CSV ファイルリソースへ更新します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none"><li>・ CSV ファイルリソースを利用しデータの読み書きをする</li><li>・ フィルタを利用してデータ加工をする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ データ転送定義</li></ul>

#### ● 事前修了しておきたい実習項目

ありません。

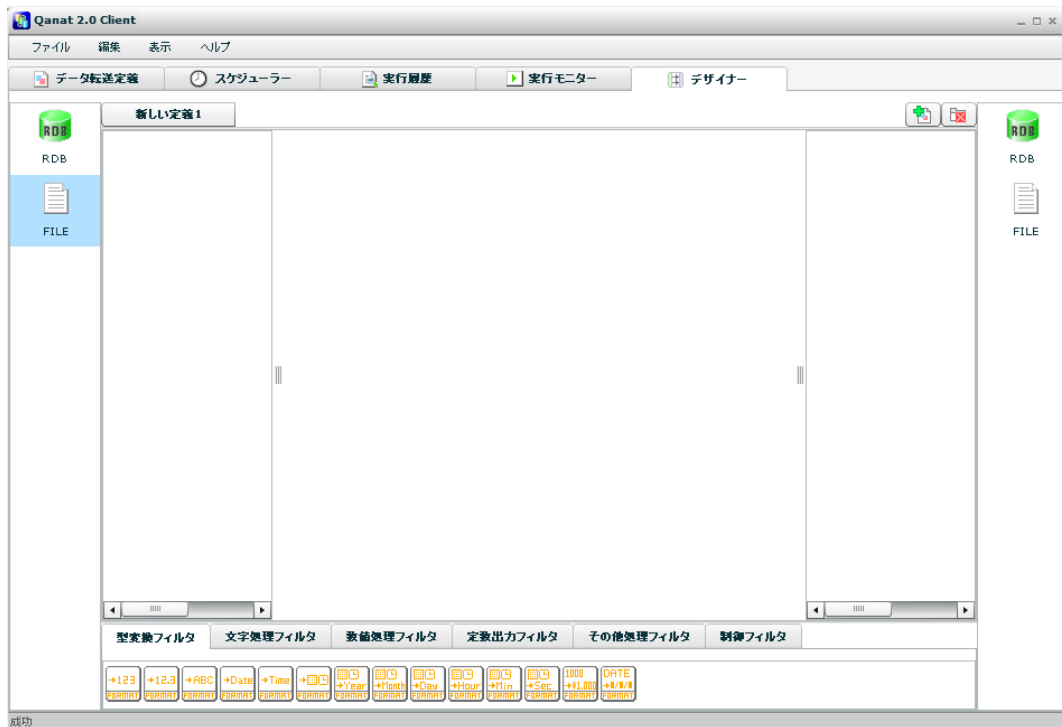
#### ● 実習のシナリオ

“東日本 CSV” フォルダの“店舗情報” ファイルからデータを読み込み、

“西日本 CSV” フォルダの“店舗情報” ファイルへデータを新規挿入します。

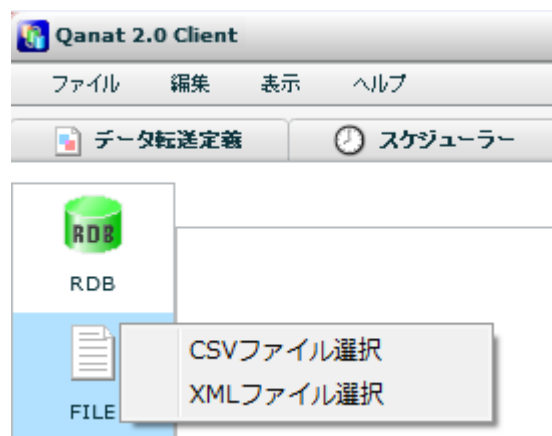
商品マスターには単価フィールドがありますが、西日本では東日本より 5% 高く設定します。

作成したデータ転送定義を保存し手動で実行します。

**手順 1： 本製品を起動し [デザイナー] タブを選択します。**

入力元（データ読み込み側）と出力先（データ書き込み側）にはファイルを利用します。

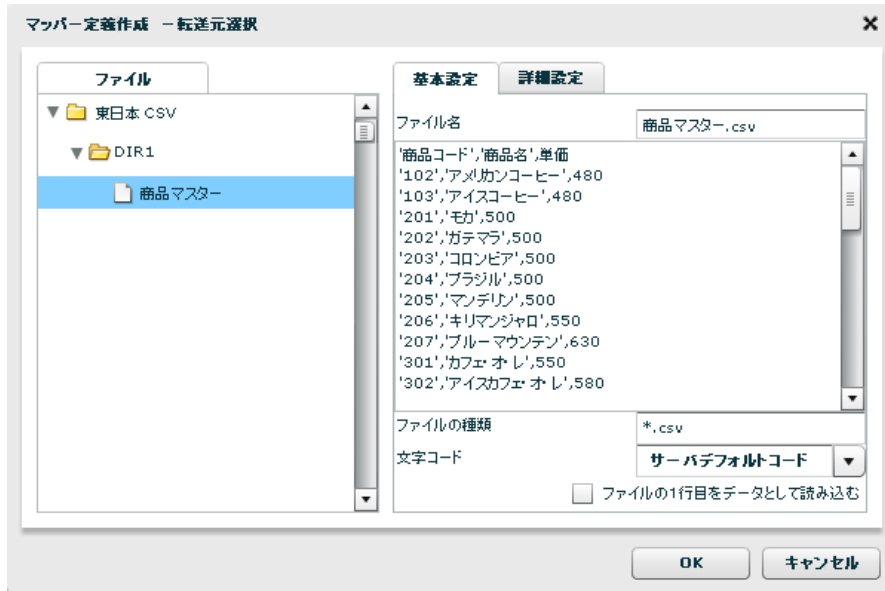
まず、入力元ではデータの読み込み先であるファイルの一つを選択します。

**手順 2： ファイルリソースから入力元ファイルを選択します**

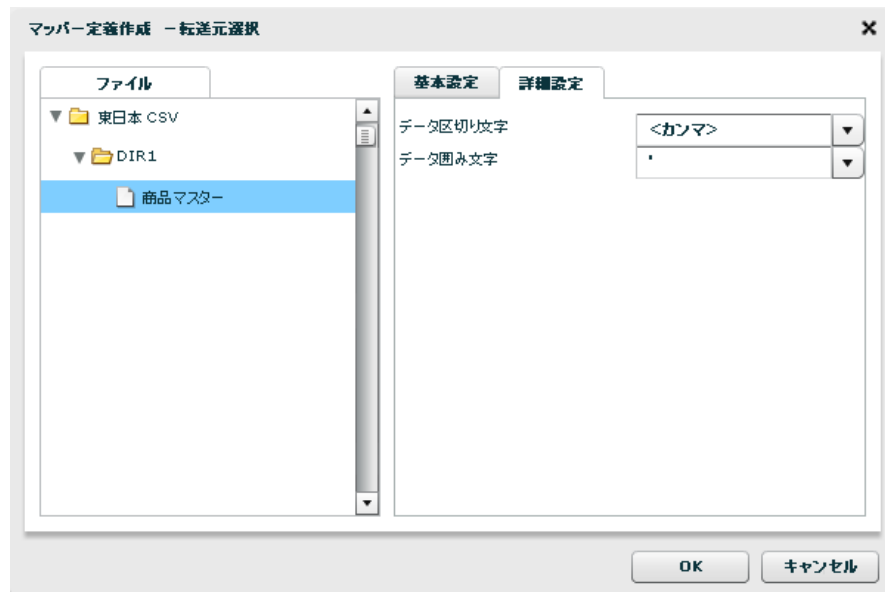
[FILE]と書かれたアイコンを右クリックし[CSV ファイル選択]をクリックします。

表示されているフォルダから目的のファイルを選択します。右側にはプレビューが表示され、データの区切り文字や囲み文字を確認します。

CSV ファイルにヘッダ行が含まれる場合は「ファイルの一行目をデータとして読み込む」からチェックを外します。



「詳細設定」タブをクリックし、先ほど確認したデータ区切り文字や囲み文字を指定します。



[OK] ボタンをクリックし転送元選択画面を閉じます。

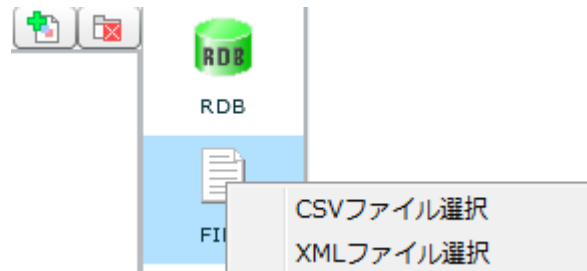
❗ データ区切り文字や囲み文字がコンボボックスの一覧にない場合、任意の文字を入力することで別の文字を指定することができます。

### 手順3: CSVファイルリソースから出力先ファイルを選択します

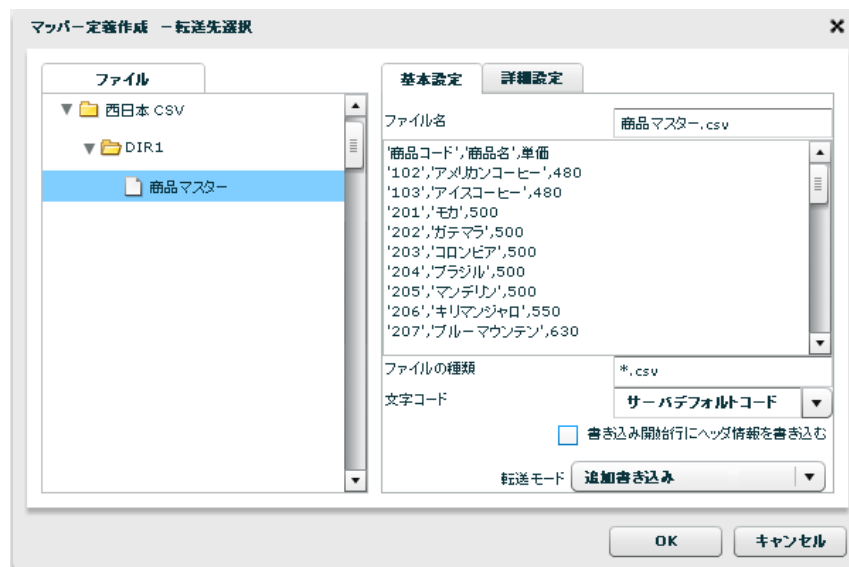
データの出力先ファイルを選択します。

手順2では“東日本 CSV”からデータを読み込むよう設定しました。手順3では出力先として“西日本 CSV”に取得したデータを転送するように指定します。

画面右側の[FILE]アイコンを右クリックし[CSVファイル選択]をクリックします。



[転送先選択]画面で“西日本 CSV”フォルダから“商品マスター”テーブルを選択し転送先ファイルを指定します。

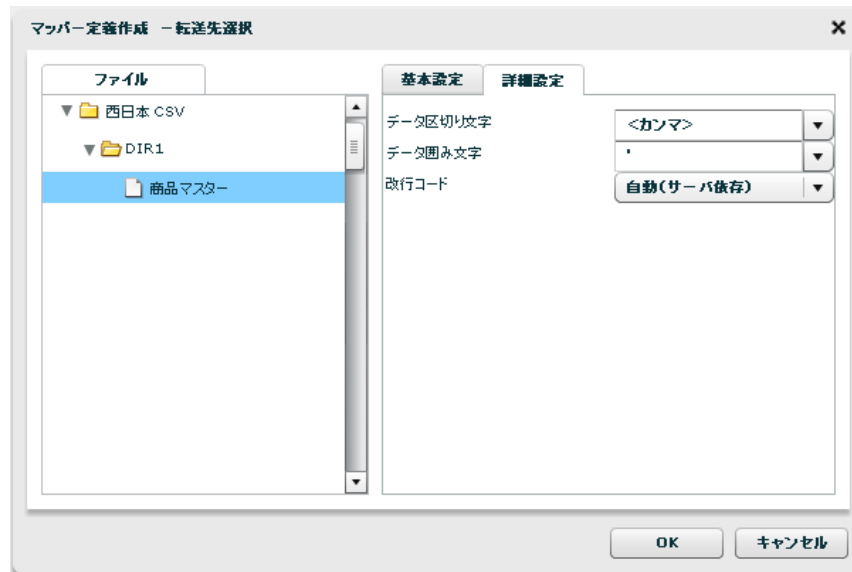


この実習では西日本 CSV フォルダに既に存在する商品マスターファイルに追加書き込みします。

ヘッダ情報は不要になるため、[書き込み開始行にヘッダ情報を書き込む]のチェックを外します。

[詳細設定]タブをクリックしデータ区切り文字と囲み文字を指定します。

では、転送モードを指定します。この実習では[インサート/アップデート]を選択します。

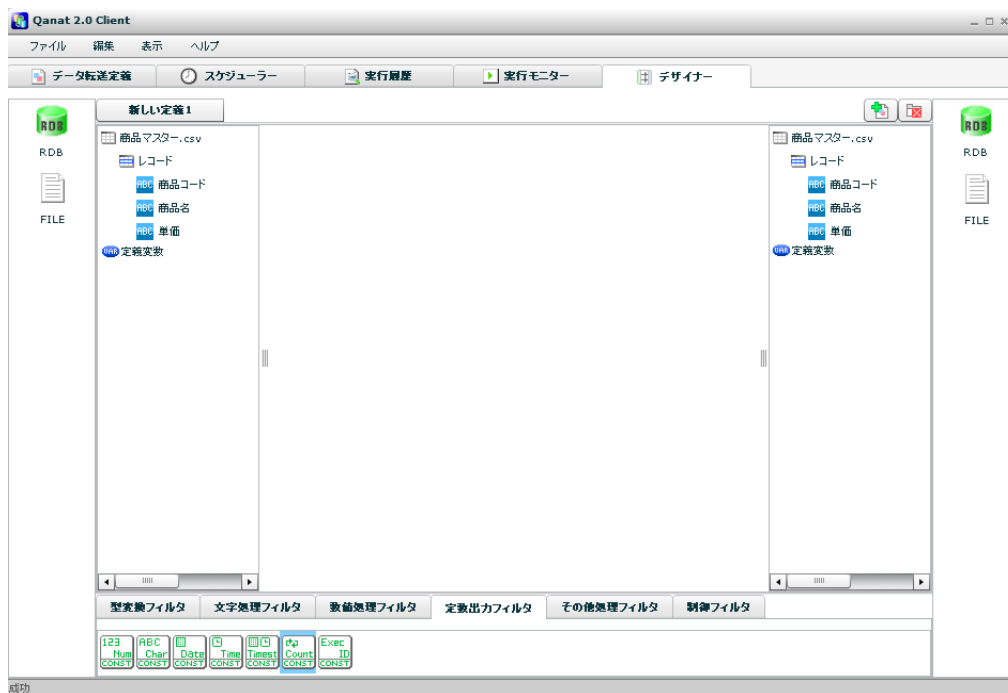


- ❗ データ区切り文字や囲み文字がコンボボックスの一覧にない場合、任意の文字を入力することで別の文字を指定することができます。

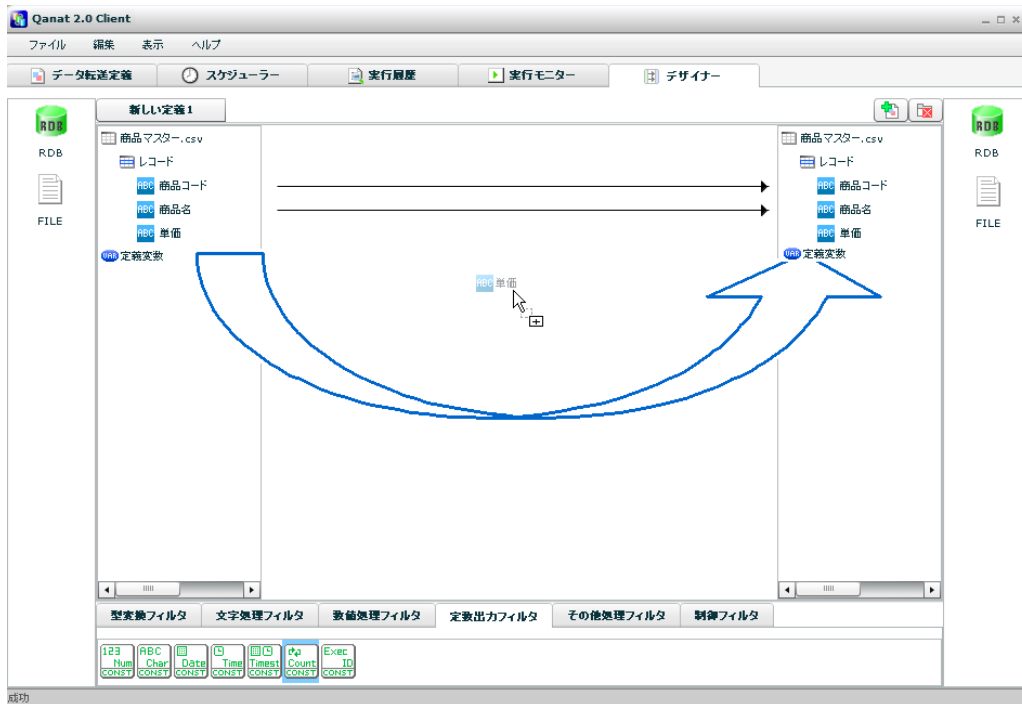
[OK] ボタンをクリックし転送先選択画面を閉じます。

#### 手順4: データマッピングをします

入力元と出力先のそれぞれのデータフィールドをつなぎ、データ転送設定をします。



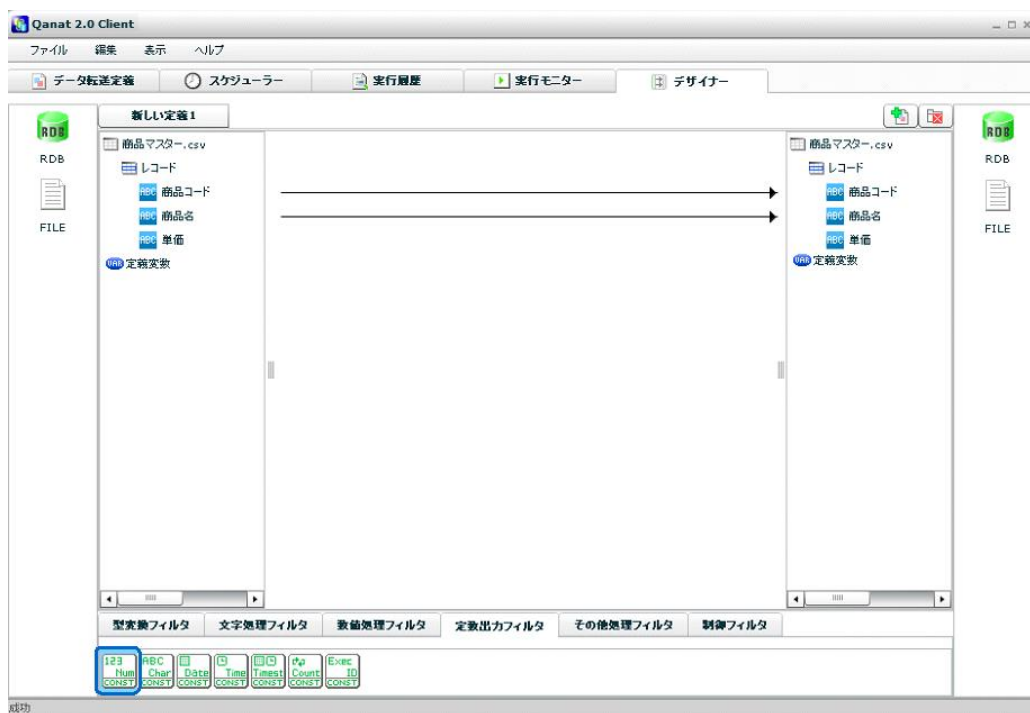
この実習では“東日本 CSV の商品マスターファイル”から“西日本 CSV の商品マスターファイル”へデータを転送することです。そのためには画面左側のフィールドを、右側の同名のフィールドに対してマウスでドラッグ&ドロップしマッピングを一つ一つ作成します。



単価フィールドは西日本のほうを5%高く設定したいため、東日本 CSV の商品マスターの単価にその分上乗せした値を、西日本 CSV の商品マスターの単価フィールドにマッピングします。

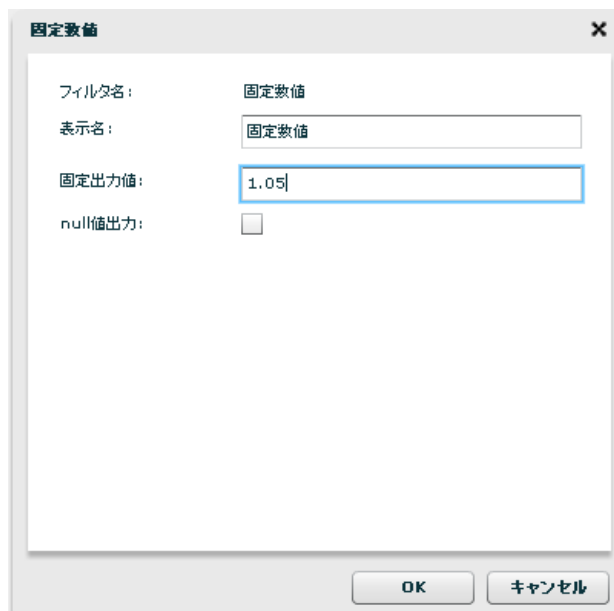
このマッピングには“5%”という値を持たせた固定数値フィルタと、掛け算フィルタを利用し表現します。

まず、画面下部の[定数出カフィルタ]タブを選択し、固定数値フィルタを画面中央のキャンバスにドラッグ&ドロップします。

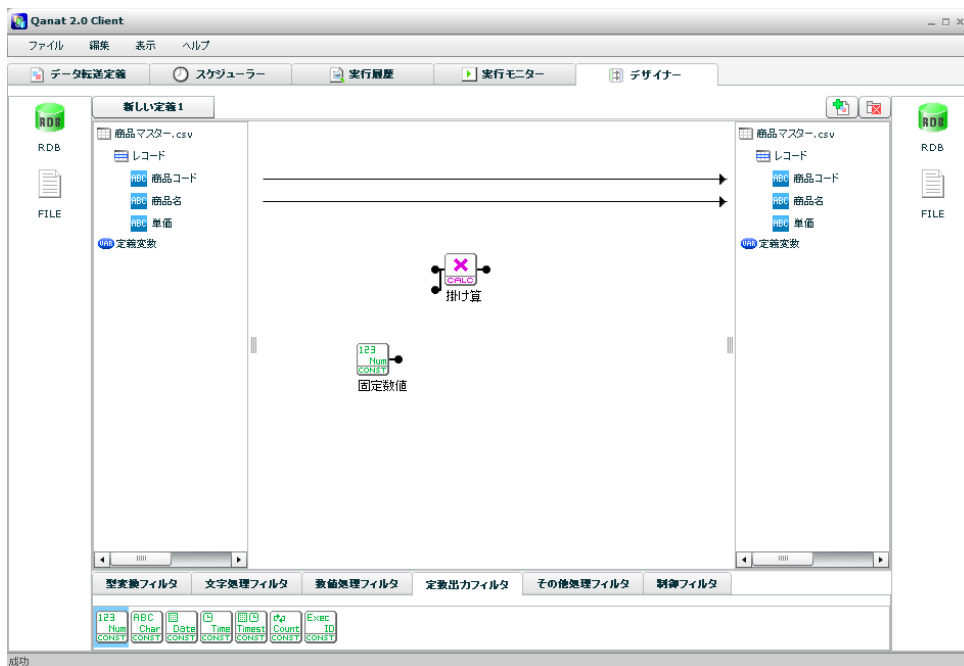


固定数値フィルタを配置すると次のようなプロパティ画面が表示されます。

固定出力値欄に5%である“1.05”と半角で入力し、[OK]をクリックします。

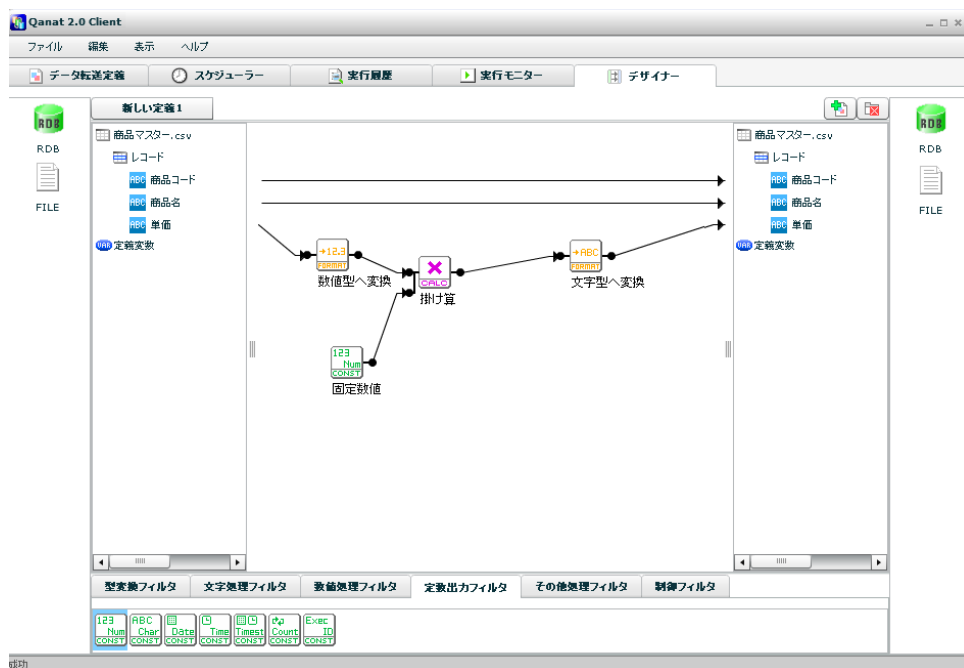


次に[数値処理フィルタ]タブから、掛け算フィルタを選択し、同様にドラッグ&ドロップし、画面中央付近に配置します。



入力元の単価フィールドと、固定数値フィルタをそれぞれ掛け算フィルタにドラッグ&ドロップしお互いを結線（マッピング）します。

そして、掛け算フィルタを出力先の単価フィールドに対してマッピングすることで5%を乗じた値を出力先の単価フィールドにセットすることができます。





CSV ファイルリソースでは各データフィールドを文字型として扱うため、整数型への変換フィルタが自動で挿入されます。



定義保存、テスト実行、定義実行はチュートリアル『1-1: データ転送定義を作成する (データベース)』を参照してください。

## XML ファイル

XML ファイルリソースに対してデータの読み取り/書き込みを行うデータ転送定義の作成を習得します。

読取ったデータはフィルタを利用してデータの加工を行った後、対象の XML ファイルリソースへ更新します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none"><li>XML ファイルリソースを利用しデータの読み書きをする</li><li>フィルタを利用してデータ加工をする</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>データ転送定義</li></ul>

### ● 事前修了しておきたい実習項目

ありません。

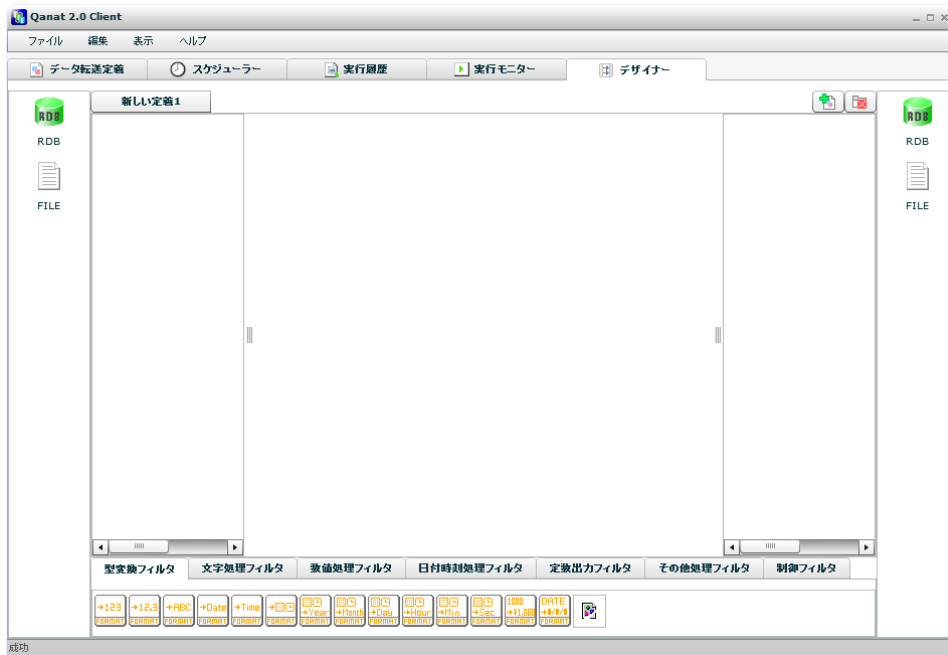
### ● 実習のシナリオ

“XML” フォルダの“売上情報” ファイルからデータを読み込み、

“XML” フォルダの“売上情報2” ファイルへデータを新規挿入します。

売上情報には単価フィールドがありますが、西日本では東日本より 5% 高く設定します。

作成したデータ転送定義を保存し手動で実行します。

**手順 1： 本製品を起動し [デザイナー] タブを選択します。**

入力元（データ読み込み側）と出力先（データ書き込み側）にはファイルを利用します。

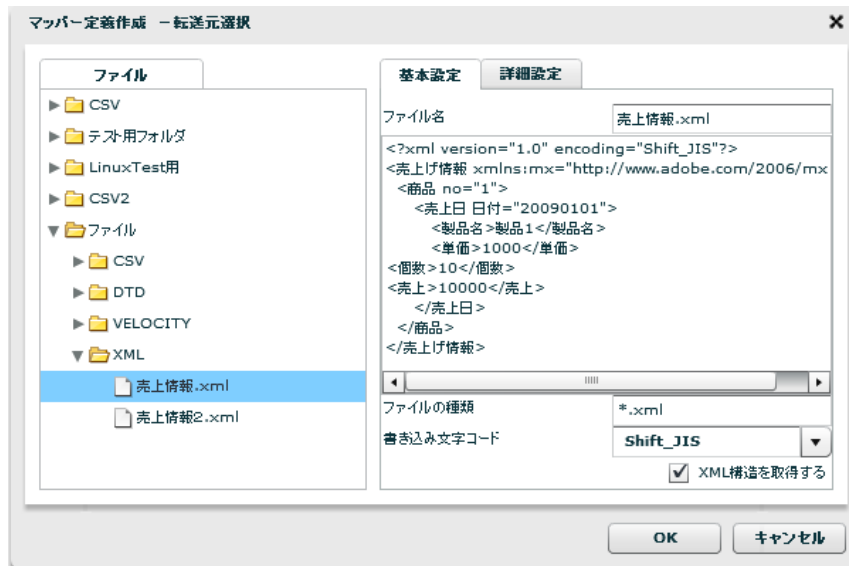
まず、入力元ではデータの読み込み先であるファイルの一つを選択します。

**手順 2： ファイルリソースから入力元ファイルを選択します**

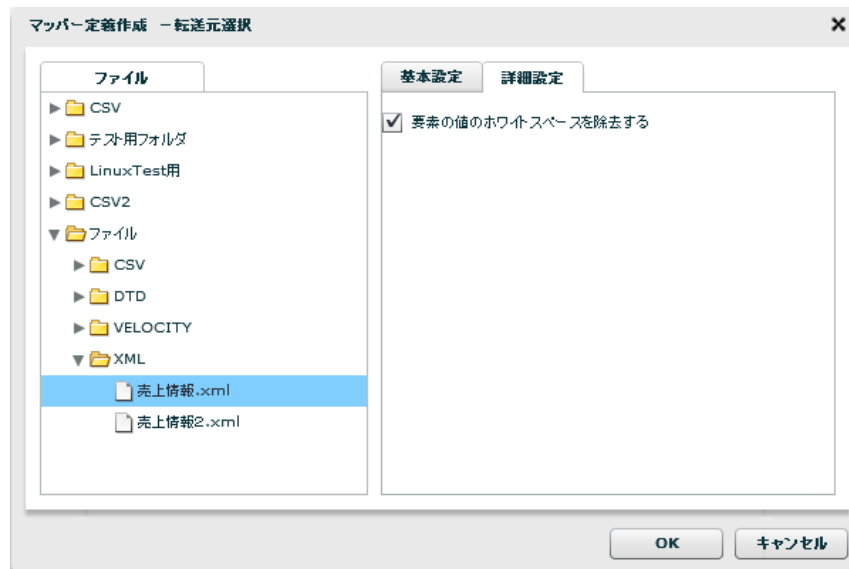
[FILE]と書かれたアイコンを右クリックし[XML ファイル選択]をクリックします。

表示されているフォルダから目的のファイルを選択します。右側にはプレビューが表示されるので要素内のホワイトスペース（タブやスペース）を確認します。

XML ファイルの構造を取得するには時間がかかる場合があるのであらかじめ [XML 構造を取得する] にチェックを入れます。



[詳細設定] タブをクリックし、先ほど確認した要素の値のホワイトスペースを除去するかを指定します。

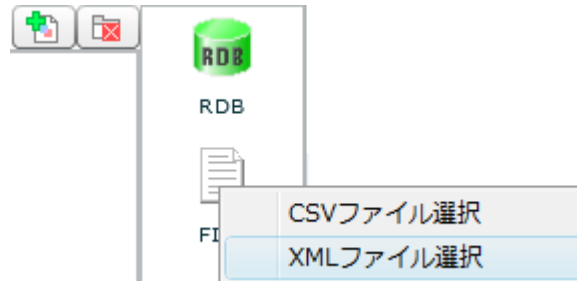


[OK] ボタンをクリックし転送元選択画面を閉じます。

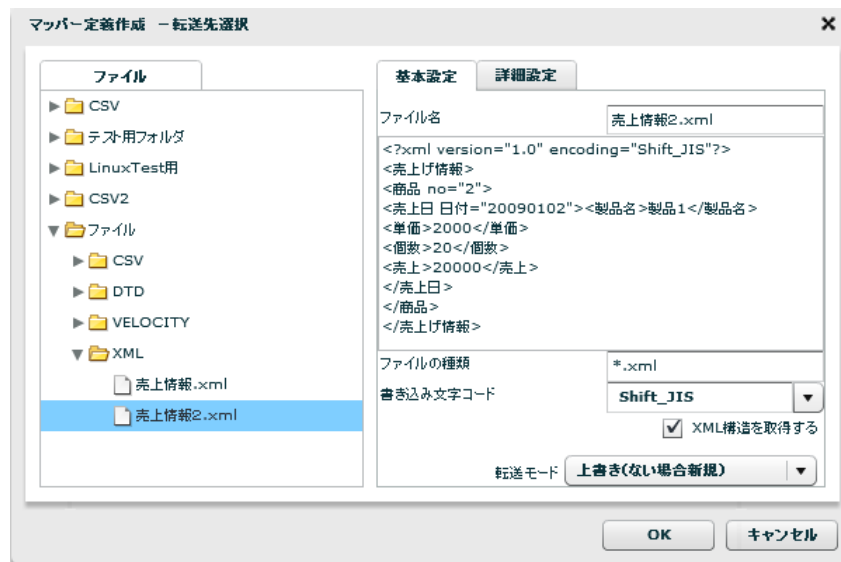
### 手順 3: XML ファイルリソースから出力先ファイルを選択します

データの出力先ファイルを選択します。

画面右側の[FILE]アイコンを右クリックし[XML ファイル選択]をクリックします。



[転送先選択]画面で“XML”フォルダから“売上情報 2”テーブルを選択し転送先ファイルを指定します。

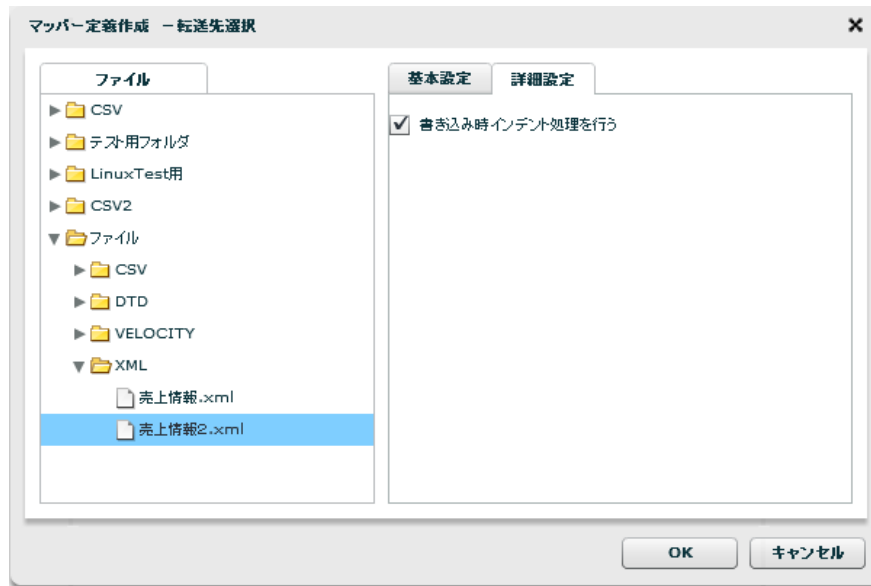


この実習では XML フォルダに既に存在する売上情報 2 ファイルに追加書き込みします。

転送元と同様に [XML 構造を取得する] にチェックを入れます。

[詳細設定]タブをクリックし書き込み時にインデント処理を行うかを指定します。

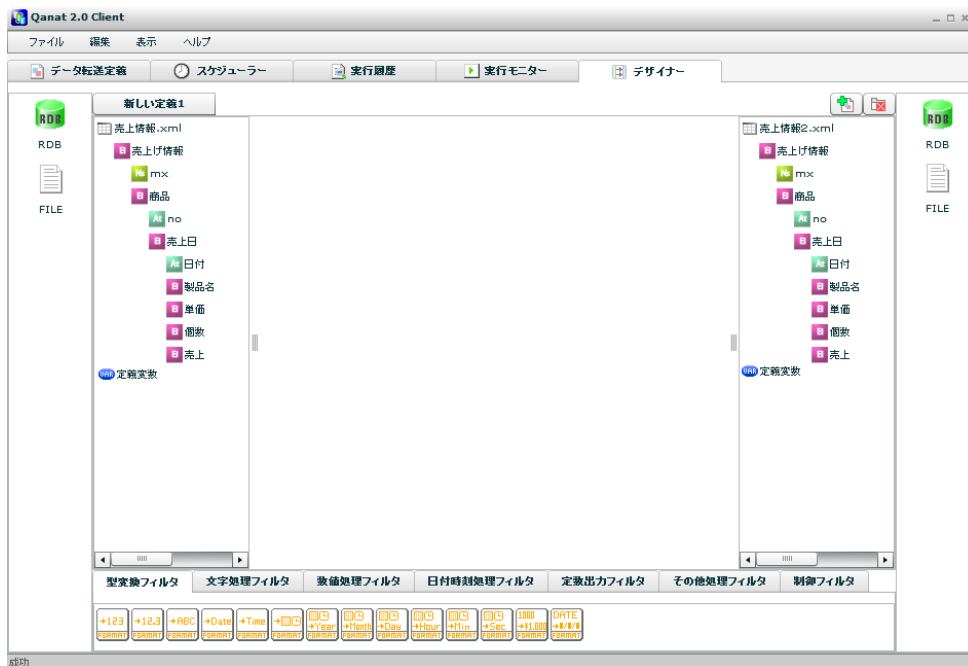
インデント処理を行うと要素の先頭が字下げされます。



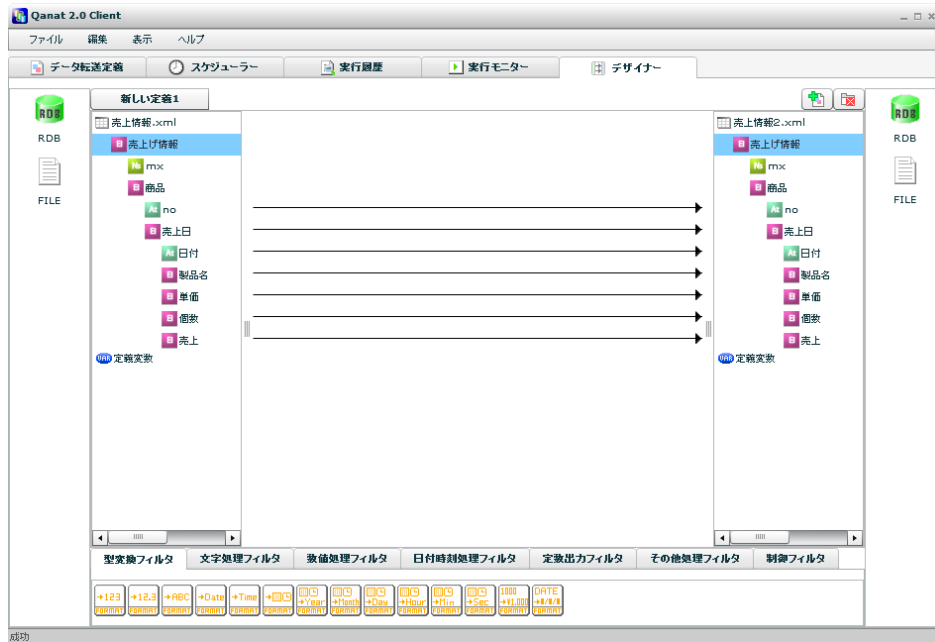
[OK] ボタンをクリックし転送先選択画面を閉じます。

#### 手順4: データマッピングをします

入力元と出力先のそれぞれのデータフィールドをつなぎ、データ転送設定をします。



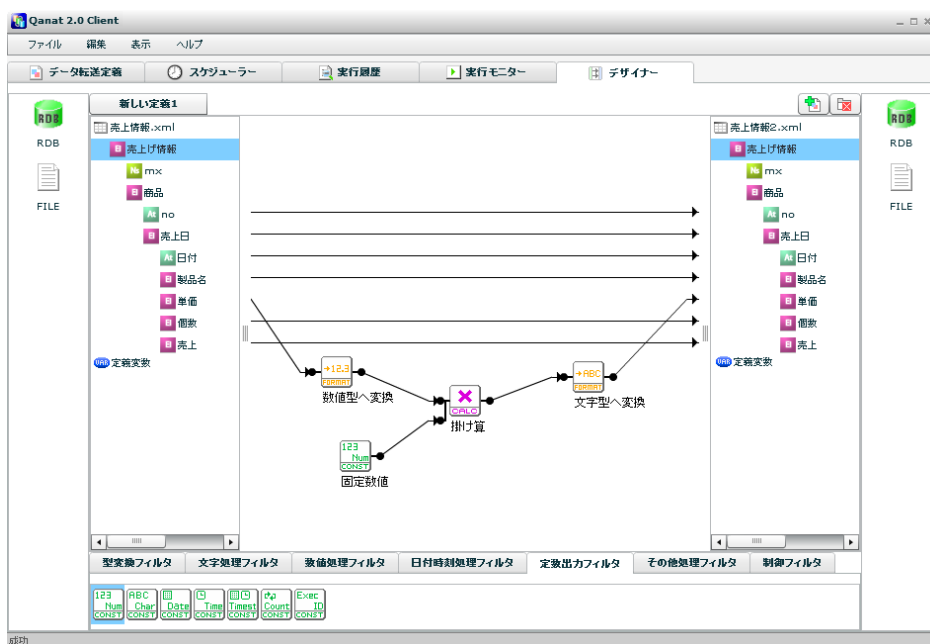
そのためには画面左側の転送したいフィールドを、右側の同名のフィールドに対してマウスでドラッグ&ドロップしマッピングを一つひとつ作成します。



単価フィールドは売上情報2のほうを5%高く設定したいため、売上情報の単価にその分上乘せした値を、売上情報2の単価フィールドにマッピングします。

このマッピングには“5%”という値を持たせた固定数値フィルタと、掛け算フィルタを利用し表現します。

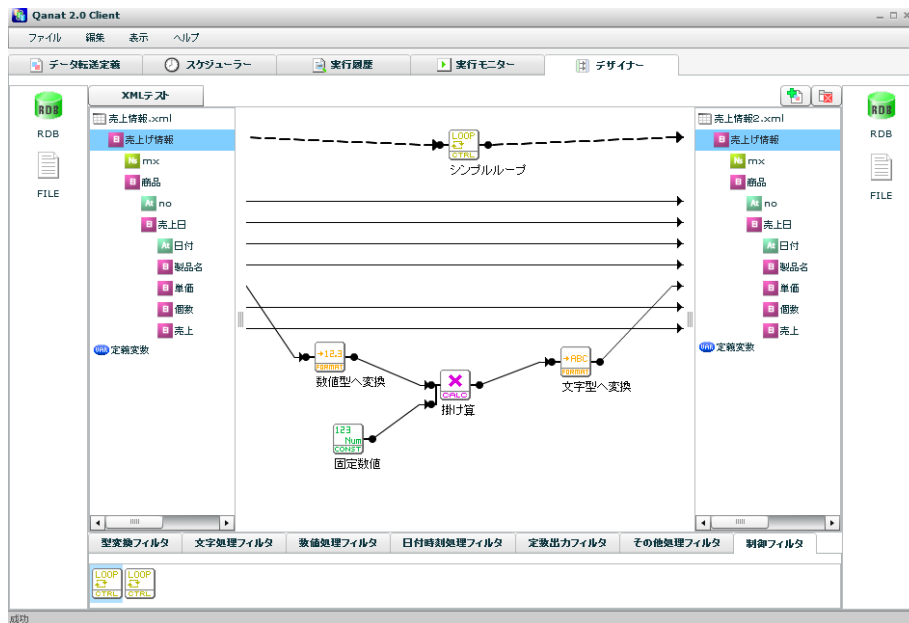
(詳しくは2-1 データ転送定義を作成する(データベース)参照)



XML ファイルリソースでは各データフィールドを文字型として扱うため、数値型へ変換フィルタ、文字型へ変換フィルタが自動で挿入されます。

最後に[制御フィルタ]タブをクリックし[シンプルループフィルタ]をマッパー上にドラッグ&ドロップします。

この[シンプルループフィルタ]と入出力の売上情報レコードを結線し、マッピングした全てのデータフィールドが転送されるようにします。



定義保存、テスト実行、定義実行はチュートリアル『1-1：データ転送定義を作成する（RDB）』を参照してください。



## 1-3 : スクリプト定義を作成する

マッパー定義ではできない or とても複雑なものもスクリプト定義で作成すればシンプルにできるといった場合があります。

ここではそういった一例を記述します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none"><li>・スクリプトによるデータ転送定義を作成する</li><li>・スクリプトの書き方を理解する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・スクリプト定義</li></ul>

### ● 事前修了しておきたい実習項目

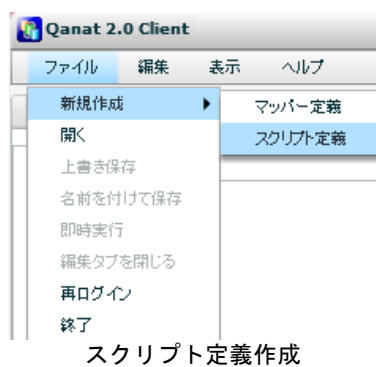
ありません。

### ● 実習のシナリオ

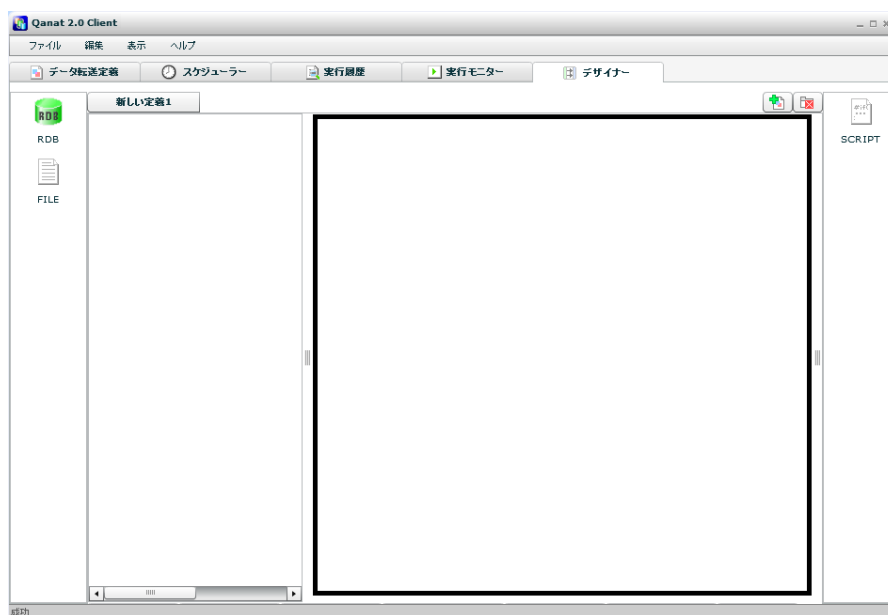
“東日本 DB” データベースの“売り上げ実績” テーブルからデータを読み込み、年度ごとの売り上げ、粗利益の合計を算出し CSV ファイルに出力する。

作成したスクリプト定義を保存し手動で実行します。

手順1: [ファイル]メニューの新規作成からスクリプト定義を選択します。

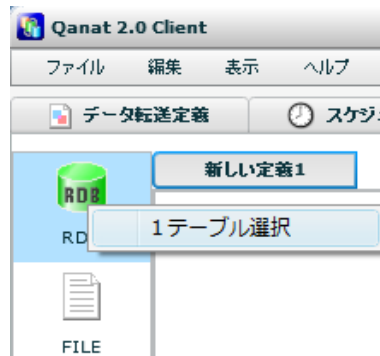


スクリプト定義作成



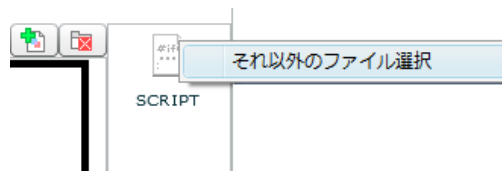
スクリプト定義新規作成画面

手順 2： 入力ソースに[東日本 DB]–[売り上げ実績]テーブルを選択する。



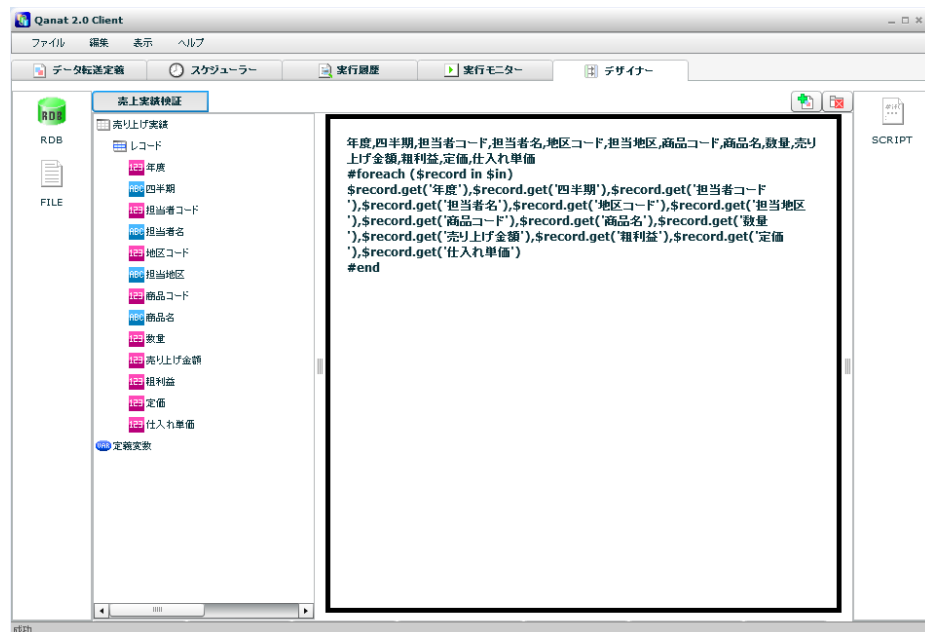
入力ソース選択

手順 3： 出力ファイルに書き込む CSV ファイルを選択する。



出力ソース選択

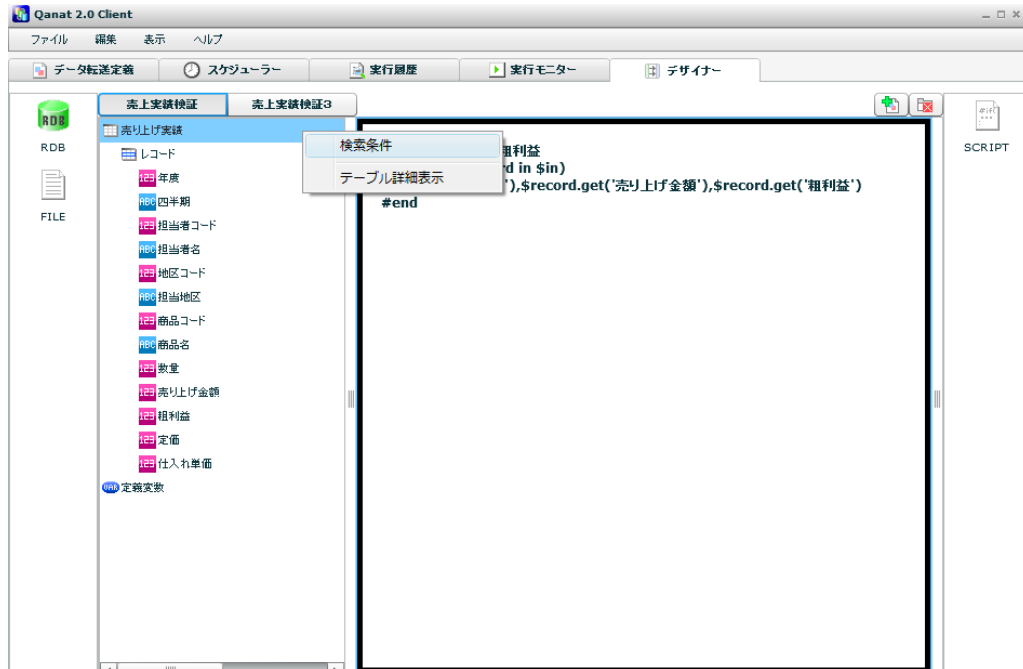
手順 4： 自動でデフォルト記述が書き込まれる。



デフォルト記述

### 手順5：年度、売り上げ、粗利益以外の項目を削除後入力データを年度を基準に並び替える。

今回の例では、年度ごとの売り上げ金額、粗利益各々の合計を算出し年度ごとにその合計値だけを書き込んでいくので、まず入力ソースのテーブルを検索条件を用いて年度を基準に並び替えます。



検索条件の選択

並替にチェックを入れ、追加ボタンを押し項目名に年度を選択し、[OK]を押します。

昇順/降順については今回の場合どちらでも構いませんが初期値の[昇順]に設定します。

並び替えの設定

**手順6： 処理の記述をする。**

売り上げ、金額、粗利益を1レコードずつ足しこんでいき、年度の値が変わったところで値を初期化した足しこんでいくという処理を記述します。

Verocityの規則に従ってこの処理を記述していくと以下のようになります。

```

年度,売り上げ金額,粗利益
#set($cnt = 0)
#set($year = 0)
#set($sell = 0)
#set($profit = 0)
#foreach ($record in $in)
#if($record.get('年度') != $year && $cnt > 0)
$year,$sell,$profit
#set($sell = 0)
#set($profit = 0)
#end
#set($cnt = $cnt + 1)
#set($year = $record.get('年度'))
#set($sell = $sell + $record.get('売り上げ金額'))
#set($profit = $profit + $record.get('粗利益'))
#end
#if($cnt > 0)
$year,$sell,$profit
#end

```

①  
②  
③  
④

処理の記述

- ① 【レコード数】、【年度】、【売り上げ】、【粗利益】の4つの変数をつくり0で初期化する。  
変数は英字のみ、売り上げと粗利益には年度ごとの合計が入る。
- ② 年度が変わったタイミングで、変わる直前の年度の売り上げと粗利益の合計を出力し、その後変数を初期化する。
- ③ そのレコードの【売り上げ】、【粗利益】を加える  
②、③の繰り返し
- ④ 最終レコードを出力する。

**!** 定義保存、テスト実行、定義実行はチュートリアル『1-1：データ転送定義を作成する（データベース）』を参照してください。

このスクリプト定義を保存し、実行すると年度と年度ごとの売り上げ、粗利益の合計が CSV ファイルに出力されます。

---

年度	売上げ金額	粗利益
2002	30000	4500
2003	25000	7500
2004	30000	10000
2008	20000	5000

#### 出力結果

このように、マッパー定義ではつくれなない or 複雑なルーチンになってしまうような処理でもスクリプト定義で比較的簡単に作成することが可能になります。

## 1-4 : QanatExecute を使用する

ここでは QanatExecute を利用して外部アプリケーション（今回は HULFT）と連携する例をあげます。

例：本製品で、データベース⇒CSV ファイルというデータ転送処理を行いその出力データを HULFT で加工する。

**手順 1 : HULFT サーバーに QanatExecute をインストールする。**

**手順 2 : インストールした QanatExecute フォルダ内のバッチファイルを編集する。**

```

QanatExecute02.bat - メモ帳
ファイル(F) 編集(E) 書式(O) 表示(V) ヘルプ(H)
@rem FOLDER フォルダ名
@rem DEF_NAME 定義名
@rem DEF_TYPE qanmapper: マッパ定義 qantask: タスク定義 qanscript: スクリプト定義
@rem VARIABLE 定義変数 (変数名=値, 変数名=値, ...)
@rem =====
SET INST_PATH=C:\Program Files\QanatExecute

SET HOST=10.40.70.196
SET PORT=6100
SET USER=cvadmin
SET PASSWORD=cvadmin
SET MENU=テスト 1
SET FOLDER=フォルダ 1
SET DEF_NAME=hulft
SET DEF_TYPE=qanmapper
SET VARIABLE=

"%INST_PATH%\jre\bin\java" -jar "%INST_PATH%\QanatExecute.jar" %HOST% %PORT% %USER% %PASSWORD% %MENU% %FOLDER% %DEF_NAME% %DEF_TYPE% %VARIABLE%

echo %errorlevel%

@rem 以下は、1/-1の時はバッチの実行結果がエラーになる

if %errorlevel%==1 goto :ERREND
if %errorlevel%==-1 goto :ERREND

:TRUEEND

PAUSE

```

HULFT と本製品連携時の QanatExecute バッチファイルの例

SET HOST :	ホスト名 or IP
SET PORT :	ポート番号
SET USER :	本製品ログイン時ユーザーID
SET PASS :	本製品ログイン時パスワード
SET MENU :	実行させる転送定義を含むメニュー名
SET FOLDER :	実行させる転送定義を含むフォルダ名
SET DEF_NAME :	実行させる転送定義名
SET DEF_TYPE :	実行させる転送定義のタイプ
SET VARIABLE :	定義変数 (変数名=値 変数名=値 . . .)

本製品では実行定義が正常終了の場合"errorlevel"=0、異常終了の場合"errorlevel" =1 or -1 になります。しかし、バッチ処理が終了するとバッチ処理が正常終了したという値として"errorlevel"=0になります。つまり、定義が正常終了したか異常終了したかに関わらず、"errorlevel"=0になってしまいます。HULFT では Execute バッチファイルが正常終了 ("errorlevel"が 0) の場合に配信処理が実行されます。(本製品の実行結果がエラーでも Execute バッチファイルとしては正常終了です)

"errorlevel"は直前の実行結果を持つため、本製品の定義の実行結果によって HULFT の配信の有無を制御したいのであれば、バッチ処理自体がエラーになるようにバッチを組んでください。例のように、"errorlevel"が 1 または-1 の場合は存在しないラベルに goto させるなどの処理を書き込むことで"errorlevel" =1 or -1 になったタイミングでバッチファイルを異常終了させ、"errorlevel"=0 になるのを回避します。

### **手順 3： バッチファイルを実行する。**

上記の QanatExecute バッチファイルを実行すると、データベース⇒CSV ファイルの転送処理がなされ、その処理が正常終了した場合だけ、HULFT で配信処理を行うという連携が可能になります。



# 第 2 章

## 第 2 章 一応用編一

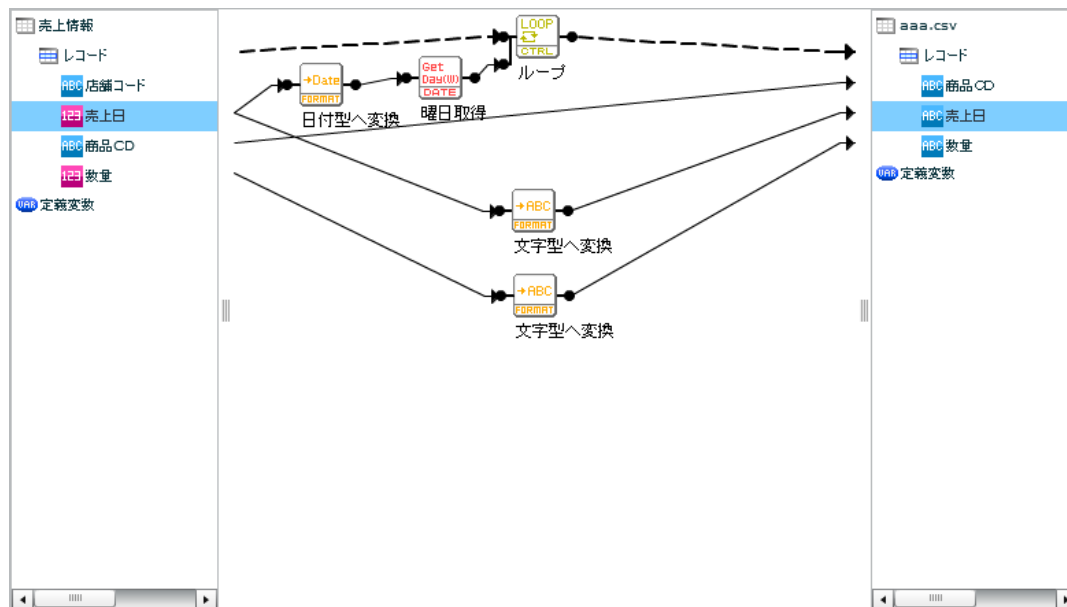
## 2-1: 便利なフィルタ (応用)

ここから便利なフィルタ群を使った実用的な例を挙げていきます。

### 例1: 売上データを読み込み木曜日の売上数量をCSVに書きこむ。

入力元データ = 東日本 DB—売上情報テーブル

出力先データ = CSV ファイル



## ① ループフィルタ

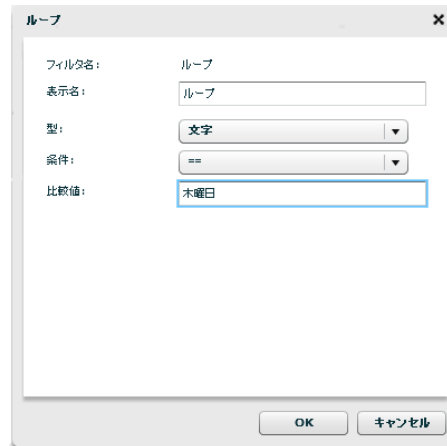
入力値が[木曜日]のレコードだけ繰り返し転送を行うよう設定します。

型 : 文字

条件 : ==

比較値 : 木曜日

に各々設定します。(下図参照)



## ② 日付型へ変換フィルタ

今回の場合売上データの日付が数値型なので日付型に変換します。

## ③ 曜日取得フィルタ

入力日付からその曜日を出します。今回は分かりやすく曜日名が日本語で出力されるように設定します。



## ④ 文字型へ変換フィルタ

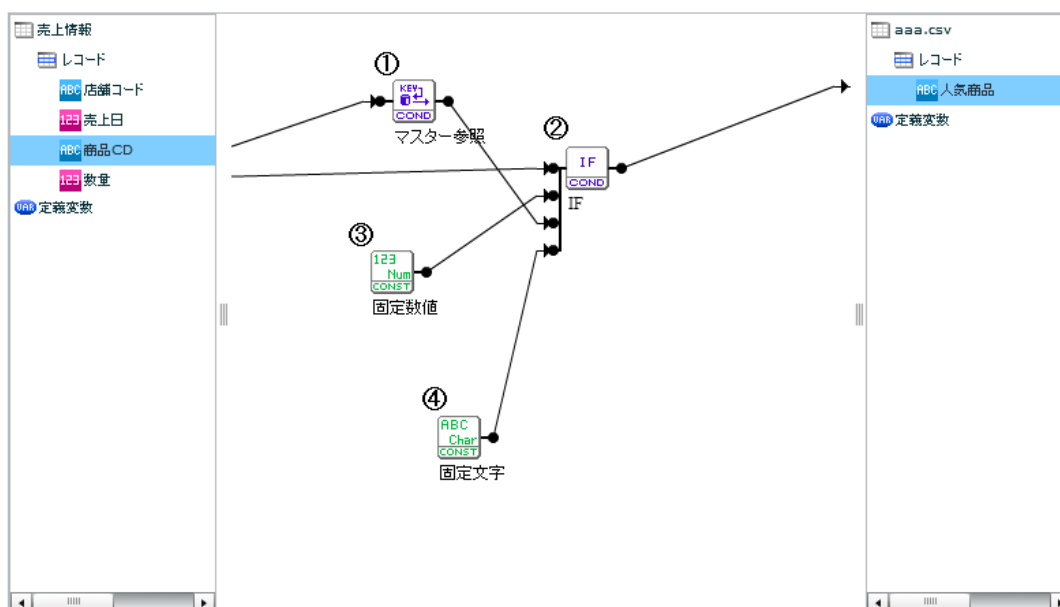
今回の場合、数量を文字型に変換して出力します。

**例 2：売上データを読み込み、①日で 150 個以上売れた商品名をマスター参照して出力。150 個売れなかった商品は「非該当」と出力。**

入力元データ＝東日本 DB—売上情報テーブル

マスター参照＝東日本 DB—商品マスターテーブル

出力先データ＝CSV ファイル



## ① マスター参照フィルタ

参照マスター情報：東日本 DB-商品マスターテーブル

キー項目：商品コード

比較：＝

出力フィールド：商品名

に設定する。

これにより、売上情報の 150 個以上売れた商品 C D と商品マスターの商品コードが等しければその商品名を出力する。

マスター参照

フィルタ名: マスター参照

表示名: マスター参照

参照マスター情報: 東日本DB >> DBADMIN >> 商品マスター

選択

No.	キー項目	比較
1	商品コード	＝

追加 削除

出力フィールド名: 商品名

OK キャンセル

## ② IF フィルタ

条件：>

フィールド 1（今回の場合数量）

フィールド 2（固定数値）

真の値（今回の場合 150 個以上売り上げた商品名）

偽の値（該当せず）

と設定。

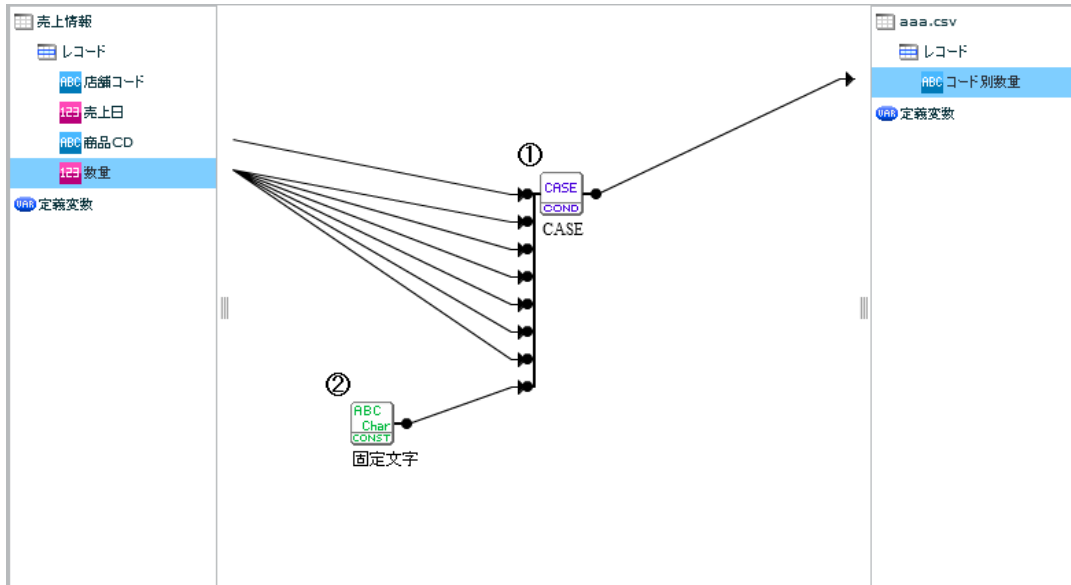
## ③ 固定数値、固定文字フィルタ

それぞれ今回の場合、“150”、“該当せず”と設定

### 例 3：売上情報テーブルの商品 CD を分類し、その数量を CSV に出力。

入力元データ = 東日本 DB—売上情報テーブル

出力先データ = CSV ファイル



#### ① CASE フィルタ

CASE 値に分類条件を書く。今回の場合正規表現を使って“1~”、“2~”・・・を設定。これらの分類条件に合わなければデフォルト値を使用。

The screenshot shows the 'CASE' dialog box. The filter name is 'CASE', the display name is 'CASE', and the condition field is 'UE\_PRCD'. The dialog contains a table with the following data:

No.	Case値	正規表現
1	1.*	<input checked="" type="checkbox"/>
2	2.*	<input checked="" type="checkbox"/>
3	3.*	<input checked="" type="checkbox"/>
4	4.*	<input checked="" type="checkbox"/>
5	5.*	<input checked="" type="checkbox"/>
6	6.*	<input checked="" type="checkbox"/>

Buttons: 追加 (Add), 削除 (Delete), OK, キャンセル (Cancel). A checkbox 'デフォルト値を使用する' (Use default value) is checked.

#### ② 定文字フィルタ

デフォルト値として“該当せず”を設定。

## 2-2:オリジナルテーブルを作成する

テーブル作成機能を利用することで、データ転送先を作成することができます。

この機能を利用することでデータベースに詳しくないユーザーも簡単にテーブル作成でき、データ転送先に利用することができます。

目的	作成されるもの
・ データベースを指定し新たにテーブル作成をする	・ データ転送定義 ・ データベーステーブル

### ● 事前修了しておきたい実習項目

1-1: データ転送定義を作成する (データベース)

### ● 実習のシナリオ

『1-1: データ転送定義を作成する (データベース)』で作成したデータ転送定義を編集します。

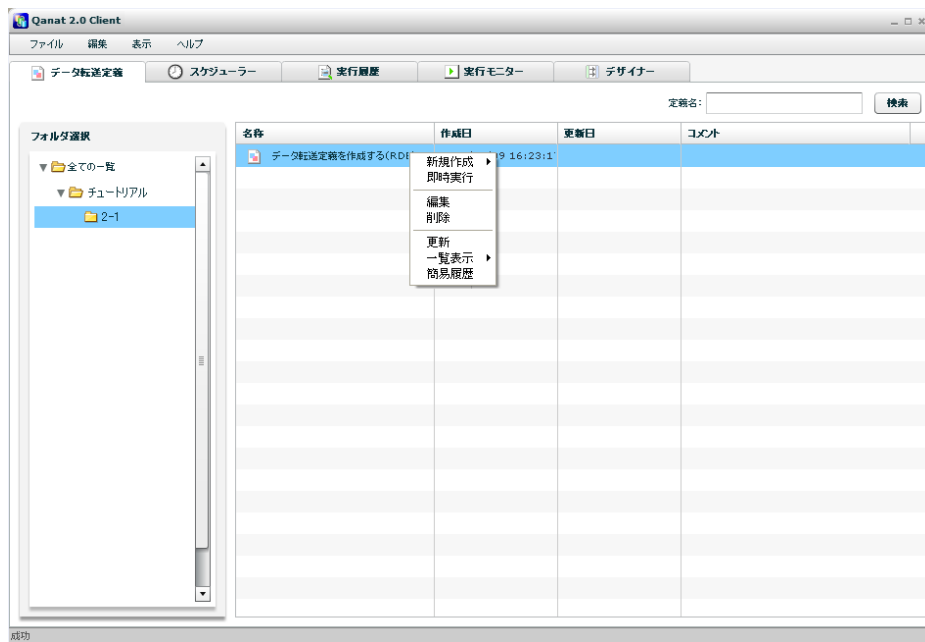
出力先リソースに指定されている西日本 DB の“商品マスター”テーブルを外し、新たに“在庫情報”テーブルを作成します。

在庫情報テーブルの主キーは商品コードとし、在庫フィールドには既定値として在庫数 100 を指定します。

また、この実習では実行時にトランザクションと障害発生時についての転送オプションを指定します。

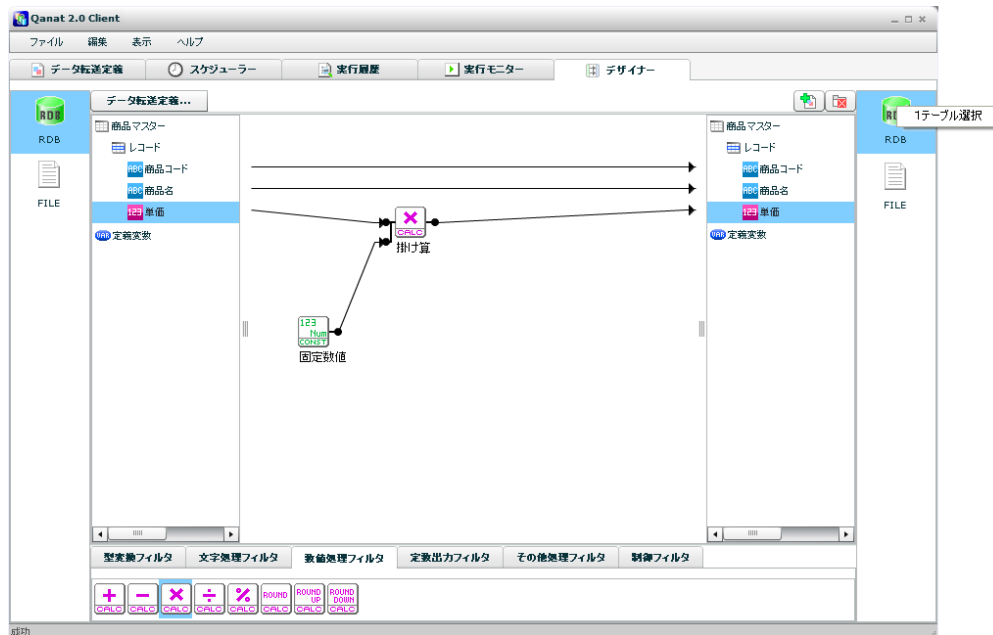
### 手順1： データ転送定義を選択し編集します

[データ転送定義]タブをクリックし『1-1：データ転送定義を作成する（データベース）』で作成したデータ転送定義を右クリックし[編集]をクリックします。



### 手順2： 作成するテーブル情報を入力します

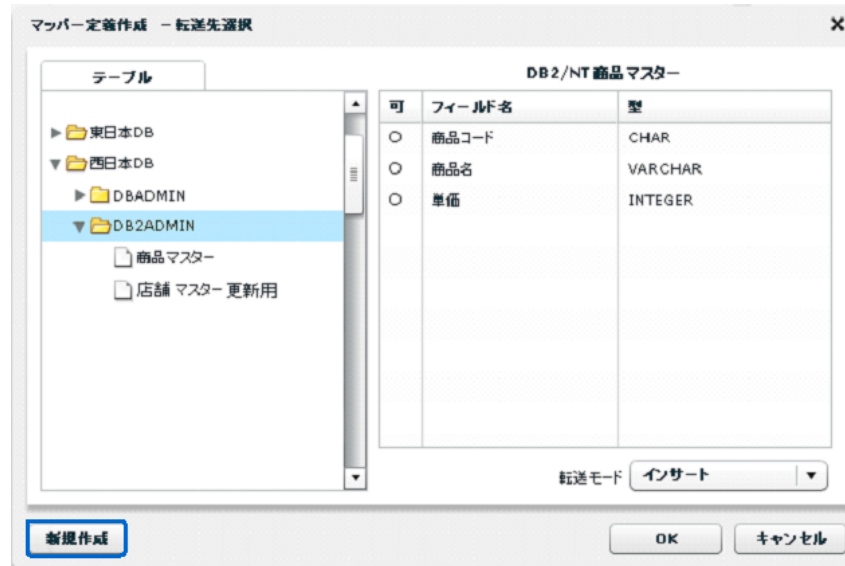
データ転送定義が復元されます。出力先リソースの[RDB]を右クリックし[1 テーブル選択]をクリックします。



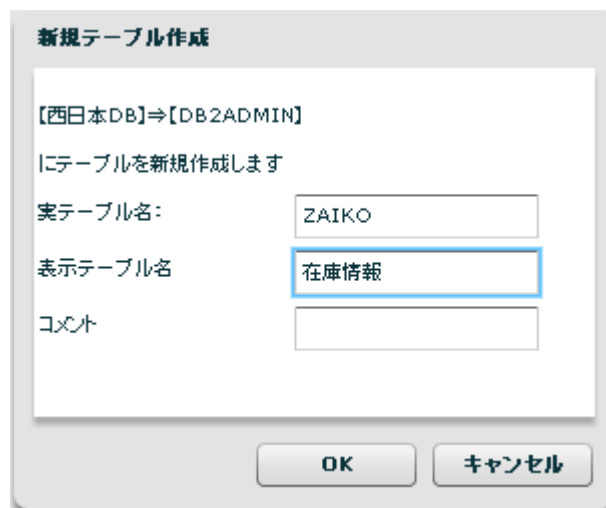


転送先選択画面が表示されます。

商品マスターテーブルのスキーマである[DB2ADMIN]と書かれたフォルダアイコンをクリックし、画面左下の有効になった[新規作成]ボタンをクリックします。

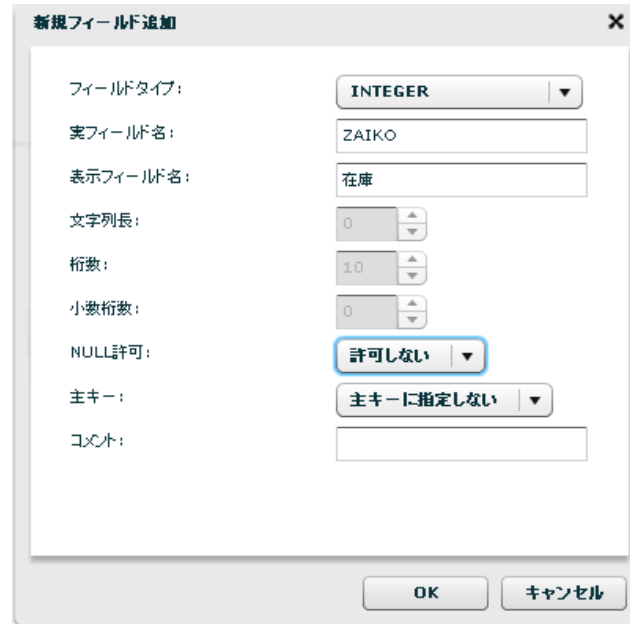


新規テーブル作成画面では、実テーブル名と画面上に表示される表示テーブル名を入力し[OK]ボタンをクリックします。



デザイナー画面に戻り、出力先テーブル情報がクリアされた代わりに[在庫情報]と表示されます。

[在庫情報]の[レコード]を右クリックし表示されたメニューから[フィールドを追加する]をクリックします。



新規フィールド追加

フィールドタイプ: INTEGER

実フィールド名: ZAIKO

表示フィールド名: 在庫

文字列長: 0

桁数: 10

小数桁数: 0

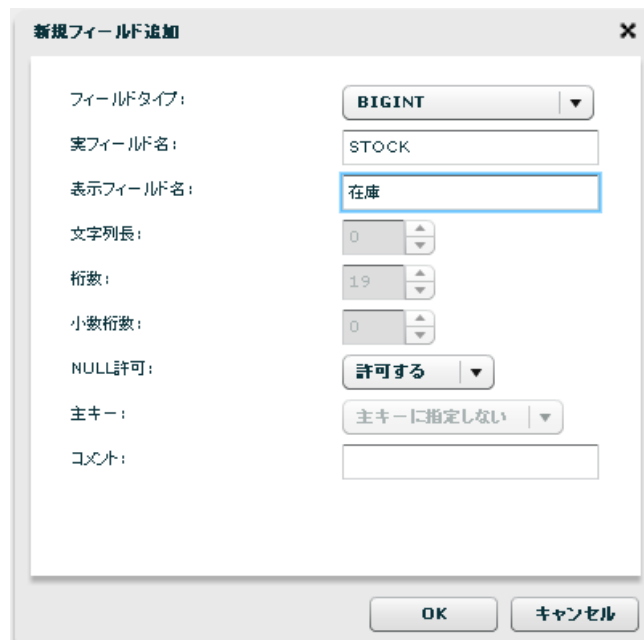
NULL許可: 許可しない

主キー: 主キーに指定しない

コメント:

OK キャンセル

新規フィールド追加画面では次のように実フィールド名と表示フィールド名を入力します。



新規フィールド追加

フィールドタイプ: BIGINT

実フィールド名: STOCK

表示フィールド名: 在庫

文字列長: 0

桁数: 19

小数桁数: 0

NULL許可: 許可する

主キー: 主キーに指定しない

コメント:

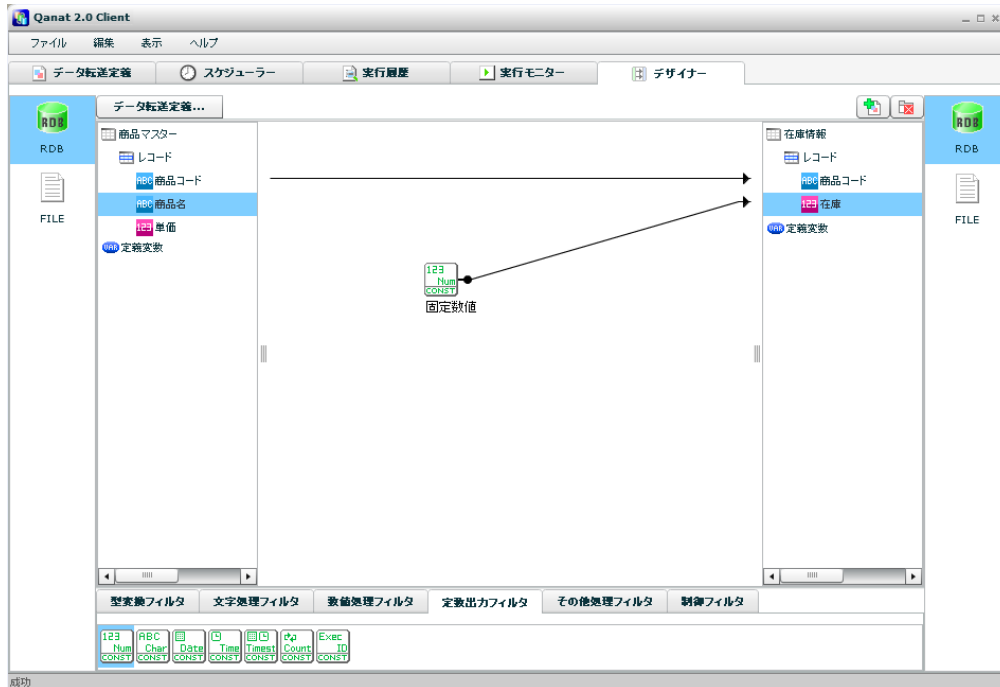
OK キャンセル

次のフィールドを出力先に追加します。

- 商品コード (文字型)
- 在庫 (数値型)

### 手順3： 各フィールドをマッピングします

画面上に追加された出力先の各フィールドに、それぞれ対応する入力元フィールドをマッピングします。  
キャンバス上に固定数値フィルタを配置し、そのプロパティの固定出力値欄に 100 を指定し、在庫フィールドと結線します。



データ転送定義を保存した時点ではじめて在庫情報テーブルが作成されます。テーブル作成に関わる各種制約はデータベースの仕様に従います。

#### 手順4: 転送オプションを指定します

ツールバーの[編集]→[転送オプション]をクリックします。

転送オプション設定

<障害発生時>

問題が発生したら直ちに停止し、処理を終了する

問題が発生したデータをスキップして、次のデータの処理を開始する

<転送モード>

リブレース

出力リソースのレコードを全削除した後、レコードをインサートします

<トランザクション>

指定しない

指定する

OK キャンセル

転送元が商品マスターとはいえ、在庫情報テーブルへのデータ転送です。処理中にエラーが発生した場合に備えデータの一貫性についても考慮すべきです。

この場合、『転送障害が発生した場合、その処理は無効とし処理前の状態に戻す』のが良いでしょう。

これを転送オプションで次のように指定します。

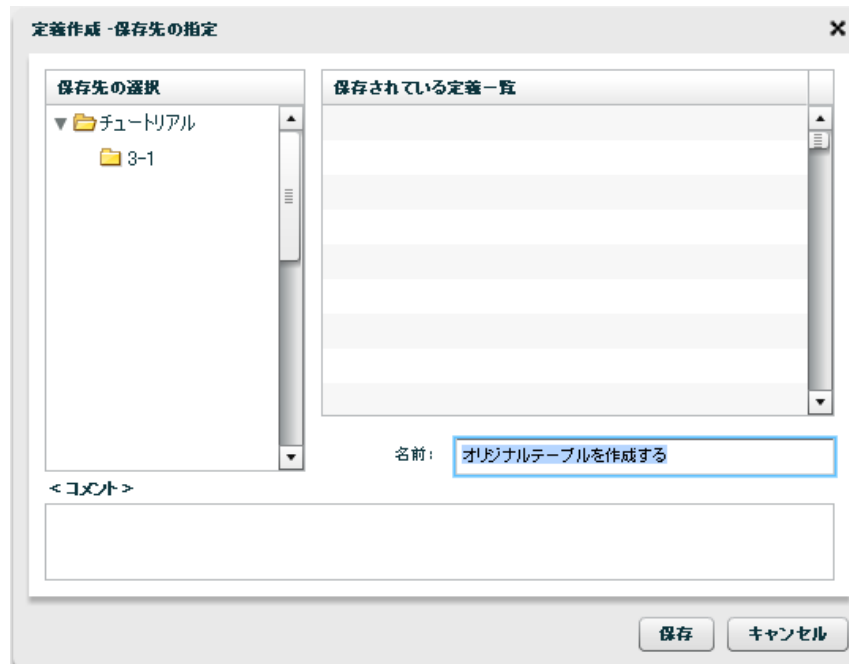
- ・[障害発生時] : **問題が発生したら直ちに停止し、処理を終了する**  
→更新データまたはシステムにエラーが発生した場合以降の処理を行いません。エラーを記録します。
- ・[トランザクション] : **指定する**  
→処理とともにトランザクションが開始されます。エラーが記録され処理が停止した場合、ロールバックを行い、処理前の状態に戻します。



[障害発生時]を **問題が発生したデータをスキップして、次のデータの処理を開始する** を選択し、[トランザクション]を **指定する** にした場合、エラーは全て無視されるためロールバックが起こることはありません。

**手順5: データ転送定義を保存し実行します**

データ転送定義名を入力し[保存]ボタンをクリックします。



在庫情報テーブルは保存が完了した時点で対象のデータベースに作成されます。

保存後、データ転送定義『オリジナルテーブルを作成する』を実行します。新しく作成された在庫情報テーブルには入力元からの商品データと在庫数 100 がセットされていることを確認できることでしょうか。

## 2-3:オリジナルファイルを作成する

### CSV ファイル

ファイル作成機能を利用することで、新規に CSV ファイルを作成することができます。

目的	作成されるもの
・フォルダを指定し新たに CSV ファイル作成をする	・データ転送定義 ・新規 CSV ファイル

#### ● 事前修了しておきたい実習項目

1-2：データ転送定義を作成する（ファイル）

#### ● 実習のシナリオ

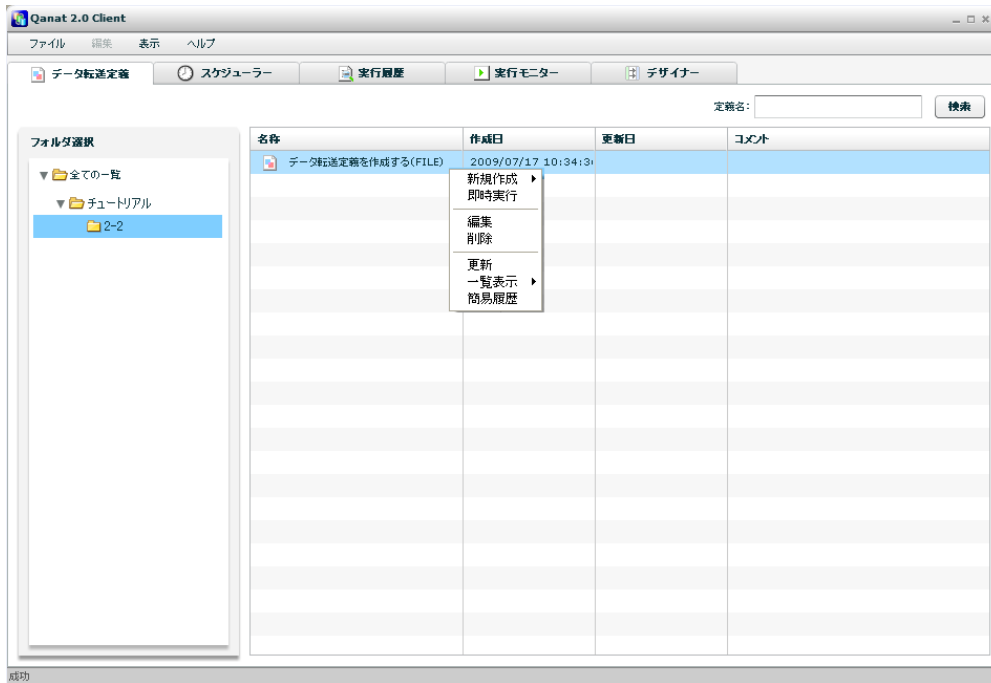
『1-2：データ転送定義を作成する（ファイル）』で作成したデータ転送定義を編集します。

出力先リソースに指定されている西日本 CSV フォルダの“店舗情報”ファイルを外し、新たに“支店情報”ファイルを作成しデータを転送します。

また、この実習ではデータ転送定義の“実行前と実行後”に処理を指定するための“前後処理”を指定します。

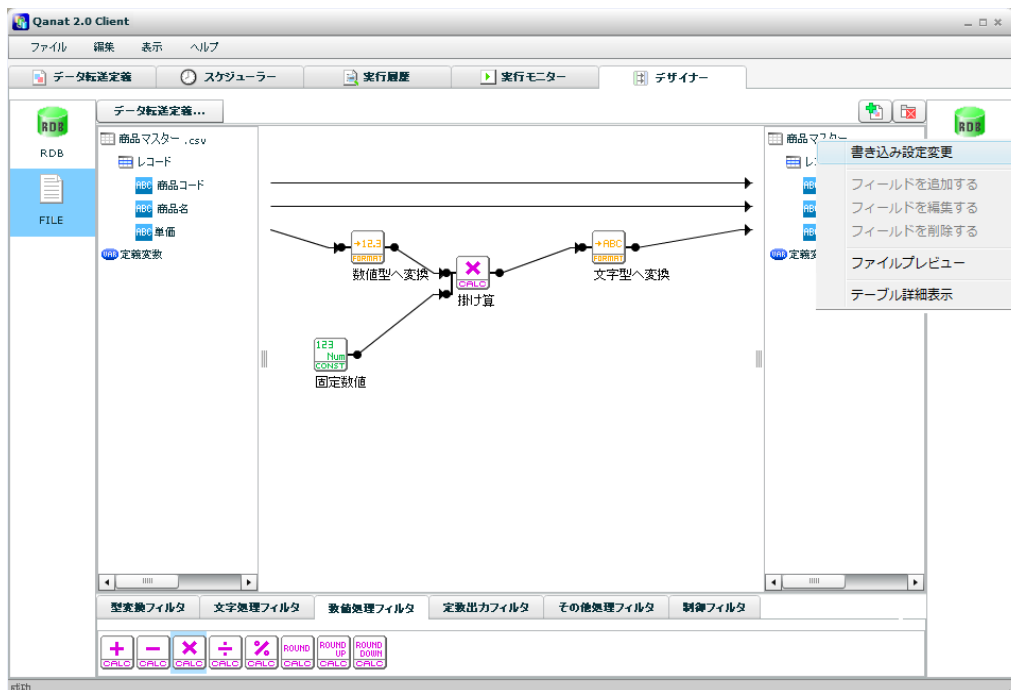
### 手順1: データ転送定義を選択し編集します

[データ転送定義]タブをクリックし『1-2: データ転送定義を作成する(ファイル)』の **CSV ファイル** で作成したデータ転送定義を右クリックし[編集]をクリックします。



### 手順2: ファイル名を変更します

データ転送定義が復元されます。出力先リソースの[商品マスター.csv]を右クリックし[書き込み設定変更]をクリックします。

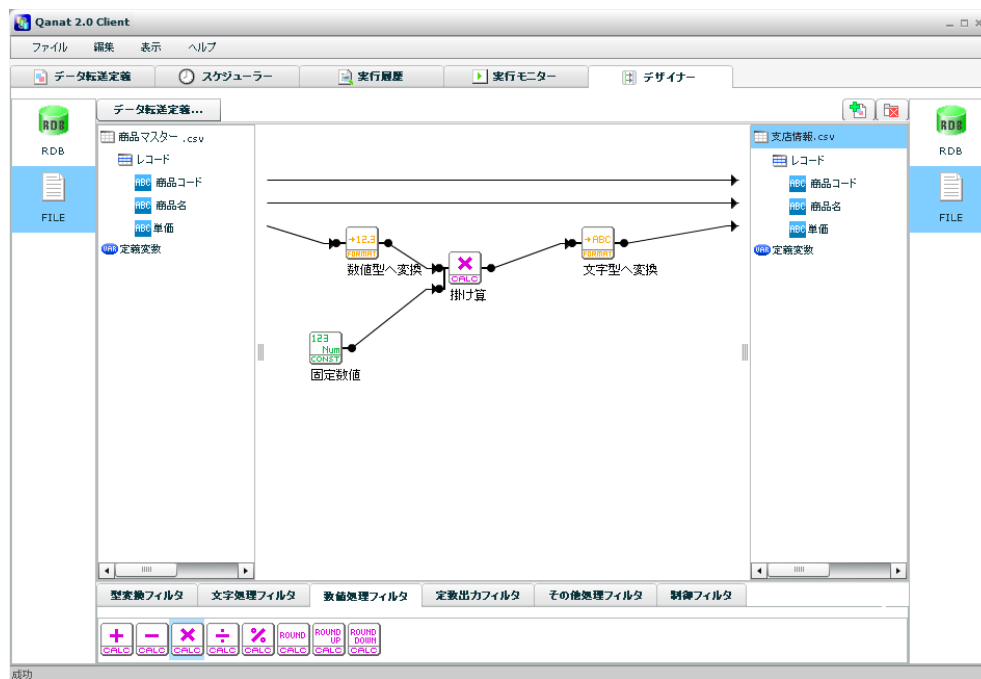


書き込み設定変更画面が表示されます。

新たに作成したいファイル名を入力し、[OK]ボタンをクリックします。



デザイナー画面に戻り、出力先ファイル名が[支店情報.csv]と表示されます。



XML ファイルでも同様にオリジナルファイルの作成が可能です。



### 手順3： 前後処理を指定します

メニューバーの[編集]→[前後処理]をクリックします。

前後処理では、データ転送定義を実行する前に実施する“前処理”と、実行した後に実施する“後処理”の二つに分かれます。

この実習では後処理を実行させます。

[後処理]タブをクリックし、画面上部の[有効にする]にチェックを付けます。

[コマンド]には本製品サーバー上で実行するコマンドを入力します。

例えば、次のように日付でファイル名をリネームするようなバッチファイルが『rename.bat』という名称であるとします。

```
set yy=%date:~0,4%
set mm=%date:~5,2%
set dd=%date:~8,2%

copy c:\qanat\csv\コピー元.csv c:\qanat\out\%yy%_%mm%_%dd%.csv
```

『rename.bat』を本製品サーバーと同じ Windows 環境の、C ドライブ直下に配置した場合、[コマンド]欄には次のように入力します。

```
C:\rename.bat
```

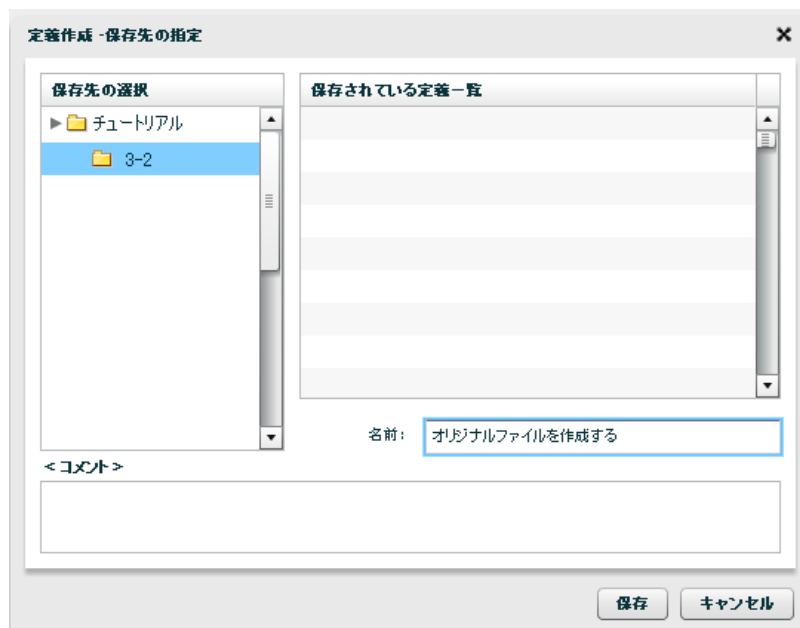
[コマンド戻り値]には任意の値を入力します。

これは次のそれぞれのチェックボックスのうちどちらを選択するかにより本製品サーバーの解釈が異なります。

- [障害発生時]をチェックした場合
  - コマンド実行の結果、入力した任意の値が返された場合は「障害」と判断されます。
- [成功時（他の値が戻った場合は障害）]をチェックした場合
  - コマンド実行の結果、入力した任意の値が返された場合は「処理成功」と判断されます。

#### 手順4： 保存し実行します

データ転送定義を保存します。



データ転送定義名を入力し[保存]ボタンをクリックします。

支店情報ファイルは保存が完了した時点で対象のフォルダに作成されます。

保存後、データ転送定義『オリジナルファイルを作成する』を実行します。新しく作成された支店情報ファイルには入力元からの店舗情報がセットされていることを確認できるでしょう。

さらに、後処理が有効であるためコマンドが実行され、その結果新たなファイルが生成されていることも確認することができます。

## 2-4: スケジュールを作成する

これまで作成した複数の異なるデータ転送定義は一つのタスク定義にまとめ、一つの実行単位にすることができます。

また、データ転送定義や、タスク定義はタイマー起動を指定することで自動実行することができます。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none"><li>・タスク定義を作成する</li><li>・スケジュール実行を作成する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・タスク定義</li><li>・スケジュール</li></ul>

### ● 事前修了しておきたい実習項目

1-1: データ転送定義を作成する (データベース)

1-2: データ転送定義を作成する (ファイル)

### ● 実習のシナリオ

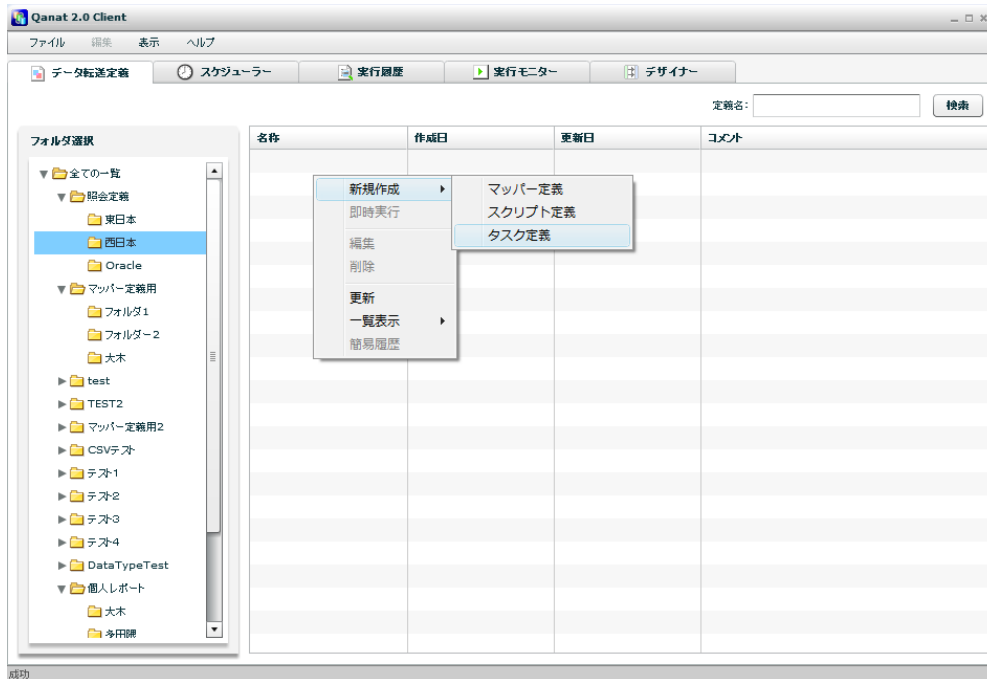
まず、二つのデータ転送定義を含めたタスク定義を一つ作成します。

作成したタスク定義は決められた日時で自動実行するようにスケジュール実行を指定します。

### 手順1： タスク定義を作成します

タスク定義では、複数のデータ転送定義を一つの意味のある実行単位にまとめ、一度の実行でそれら複数のデータ転送定義を順序を指定して実行します。

右クリックメニューの[新規作成]→[タスク定義]をクリックします。



タスク定義作成では、まとめたい定義を保存先フォルダから選択し[追加]ボタンをクリックします。

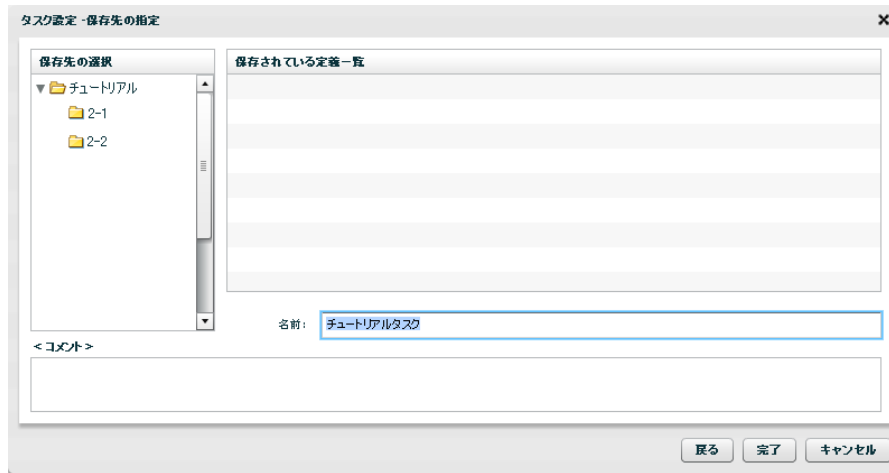
データ転送定義と同様に障害発生時とトランザクション指定が行えます。



[次へ]ボタンをクリックし保存先の指定と名前を入力します。

- ❗ トランザクション指定では出力ソースが異なる今回のチュートリアルのような場合は指定することができません。

[完了]をクリックし保存します。

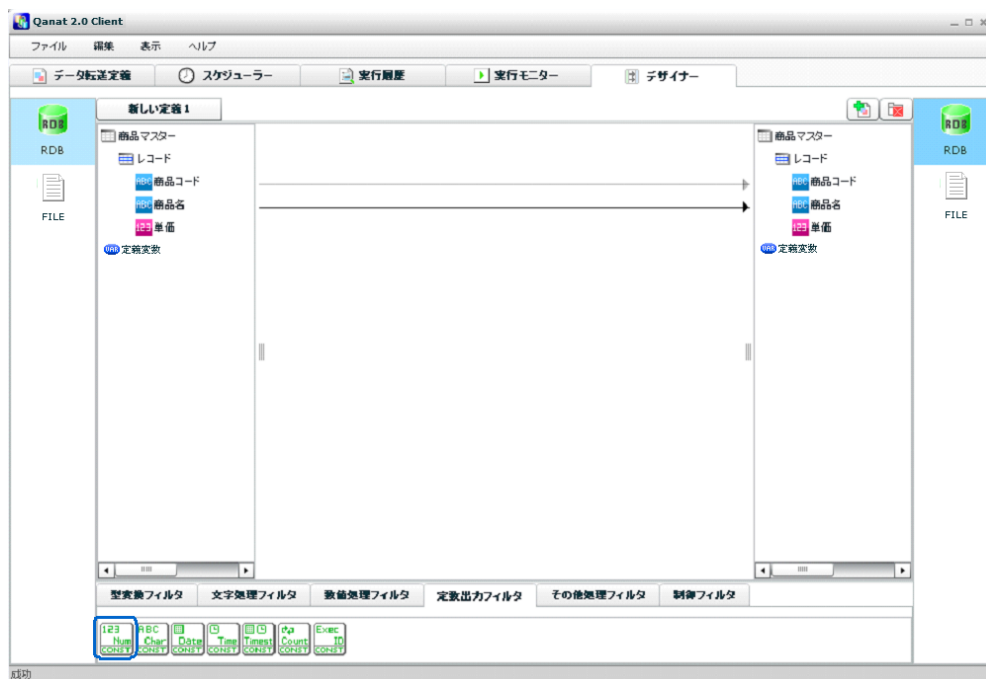


次に、作成した『チュートリアルタスク』をスケジュール実行します。

## 手順2: スケジュール定義を作成します

[スケジューラー]タブを開きます。

画面の空白箇所を右クリックしメニューから[新規作成]→[スケジュール]をクリックします。



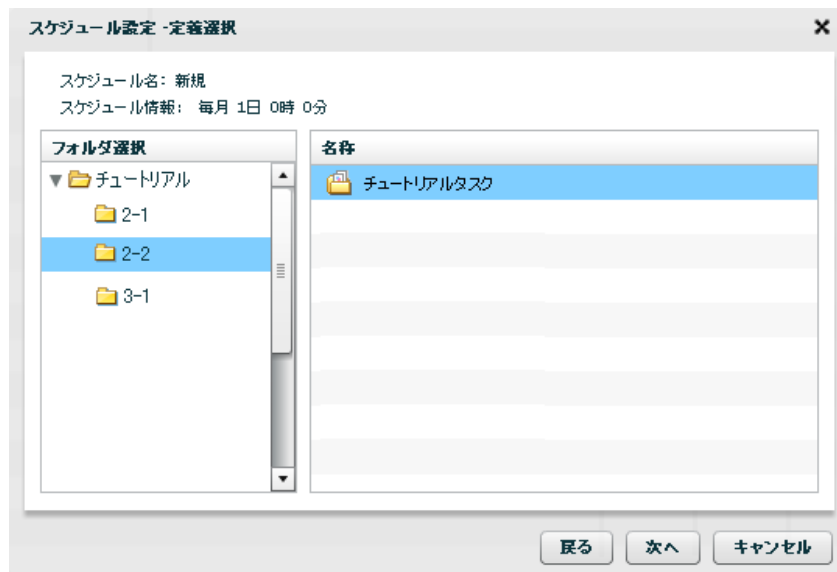
実行タイプ画面では自動実行するタイミングを指定します。

この実習では『毎月1日の午前0時』を指定します。

[次へ]をクリックします。

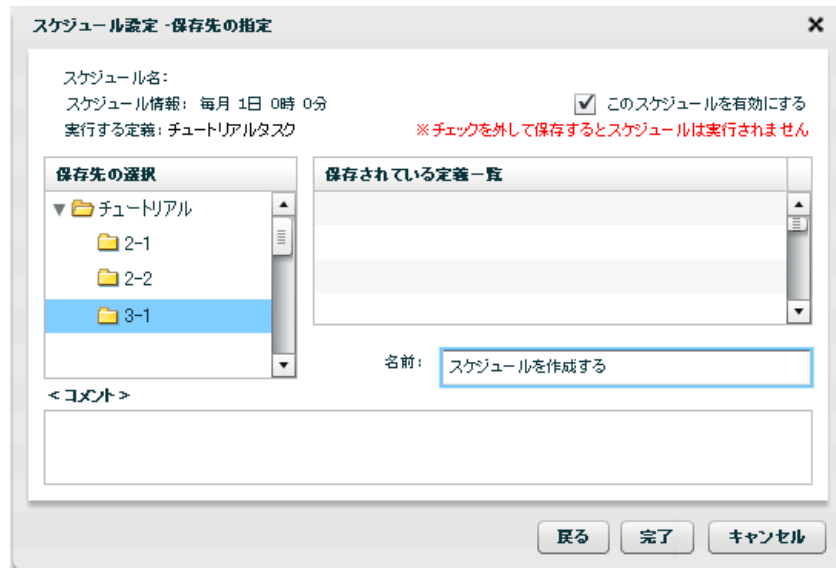


実行させたい定義を選択し、[次へ]をクリックします。

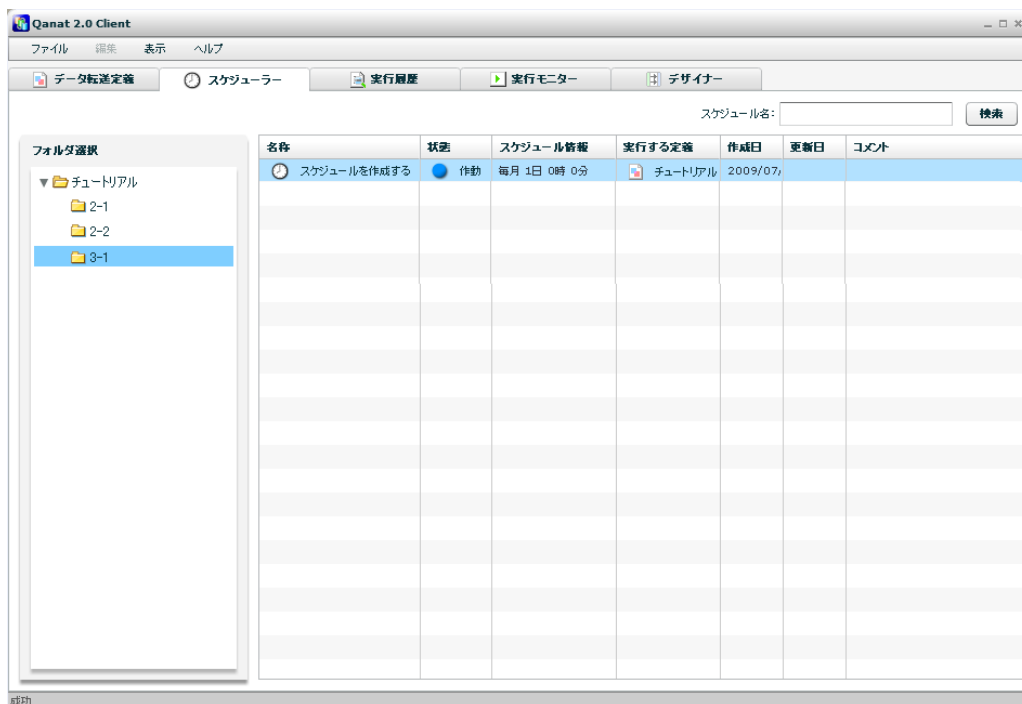


スケジュール名を入力し保存先を指定します。

[完了]をクリックします。このとき画面上部の[このスケジュールを有効にする]をチェックします。



保存後、スケジューラタブの一覧画面で作成したスケジュール定義が有効となっていることを確認します。



決められた日時に指定されたデータ転送定義が実行されます。

Qanat 2.0 チュートリアル

第 1 版 2010 年 1 月 29 日

発行 JB アドバンスト・テクノロジー株式会社

〒221-0022 神奈川県横浜市神奈川区守屋町 3 丁目 9 番地 C 号ビル

お問い合わせ 弊社ホームページより、お問い合わせください。

<http://www.jbat.co.jp/>

本書は著作権上の保護を受けており、本書の全部あるいは一部に関して、JB アドバンスト・テクノロジー株式会社からの文書による許諾を得ず、無断で複写、複製することは禁じられています。また、本書はユーザーへ通知することなく変更される場合があります。